

# ふるさと

島崎藤村

青空文庫



## はしがき

とう 父さんが遠い外 國の方から歸つた時、太郎や次郎への土産話にと思ひまして、いろ  
 くな旅のお話をまとめたのが、父さんの『幼きものに』でした。あの時、太郎はやうや  
 く十三歳、次郎は十一歳でした。  
 早いものですね。あの本を作つた時から、もう三年の月日がたちます。太郎は十六歳、次  
 郎は十四歳にもなります。父さんの家には、今、太郎に、次郎に、末子の三人が居ます。  
 末子は母さんが亡くなると間もなく常陸の方の乳母の家に預けられて、七年もその乳母の  
 ところに居ましたが、今では父さんの家の方へ歸つて來て居ます。三郎はもう長いこと  
 信州木曾の小父さんの家に養はれて居まして、兄の太郎や次郎のところへ時々お手  
 紙などをよこすやうになりました。三郎はことし十三歳、末子がもう十一歳にもなりま  
 すよ。  
 とう 父さんの家ではよく三郎の噂をします。三郎が居る木曾の方の話もよく出ます。あの  
 きそ やまなかとう 木曾の山の中が父さんの生れたところなんですから。

人はいくつに成つても子供の時分に食べた物の味を忘れないやうに、自分の生れた土地のことを忘れないものでね。假令その土地が、どんな山の中でありましても、そこで今度、父さんは自分の幼少い時分のことや、その子供の時分に遊び廻つた山や林のお話を一冊の小さな本に作らうと思ひ立ちました。あの『幼きものに』と同じやうに、今度の本も太郎や次郎などに話し聞かせるつもりで書きました。それがこの『ふるさと』です。

一 雀のおやど

みんなお出いで。お話しはなしませう。先づ雀のおやどから始めはじませう。

雀すずめ、雀すずめ、おやどはどこだ。

雀のお家は林の奥の竹やぶにありました。この雀には父さまも母さまもありました。楽しいお家の前は竹ばかりで、青いまつすぐな竹が澤山に竝んで生えて居ました。雀は毎日のやうに竹やぶに出て遊びましたが、その竹の間から見ると、楽しいお家がよけいに楽しく見えました。

そのうちに、雀の好きなお家の前には竹の子が生えて來ました。母さまのお洗濯する方へ行つて見ますと、そこにも竹の子が出て來てゐました。

『あそこにも竹の子。ここにも竹の子。』

と雀はチユウチユウ鳴きながら、竹の子のまはりを悦んで踊つて歩きました。僅か一晩ばかりのうちに竹の子はずんずん大きくなりました。雀が寝て起きて、また竹やぶへ遊びに行きますと、きのふまで見えなかつたところに新しい竹の子が出て來たのが

あります。きのふまで小さな竹の子だと思つたのが、僅か一晩ばかりで、びつくりするほど大きくなつたのがあります。

すずめ 雀はおどろいて、母さまのところへ飛んで行きました。母さまにその話をして、どうしてあの小さな竹の子があんなに急に大きくなつたのでせうと尋ねました。すると母さまは可愛い雀を抱きまして、

『お前は初めて知つたのかい、それが皆さんのよく言ふ「いのち」（生命）といふものですよ。お前たちが大きくなるのもみんなその力なんですよ。』  
と話してきかせました。

## 二 五木の林

たらう 太郎よ、次郎よ、お前達は父さんの生れた山地の方のお話を聞きたいと思ひますか。  
ひのき さはら 榎木、明檜、榎、ねず —それを木曾の方では五木といひまして、さういふ木の生えた森や林があつた深い谷間に茂つて居るのです。五木とは、五つの主な木を指して言ふのですが、まだその他に栗の木、杉の木、松の木、桂の木、檜の木などが生えて居ます。榎の

木、樺の木も生えて居ます。それから栃の木も生えて居ます。太郎や次郎は一度父さんに隨いて、三郎の居る木曾の小父さんの家を訪ねたことが有りましたらう。あの小父さんの家の前から、木曾川の流れるところを見て來ましたらう。小父さんの家のある木曾福島町は御嶽山に近いところですが、あれから木曾川について十里ばかりも川下に神坂村といふ村があります。それが父さんの生れた村です。

### 三 山の中へ來るお正月

父さんも昔はお前達と同じやうに、お正月の來るのを楽しみにした子供でしたよ。お正月が來る時分になると、父さんの生れたお家では自分のところでお餅をつきました。そのお餅は爐邊につづいた庭でつきましたから、そこへ爺やが小屋から杵をかついで來ました。臼もころがして來ました。お餅にするお米は裏口の竈で蒸しましたから、こへも手傳ひのお婆さんが來て楽しい火を焚きました。やがて蒸籠といふものに入れて蒸したお米がやはらかくなりますとお婆さんがそれを白の中へうつします。爺やは杵でもつて、それをつき始めます。だんだんお米がねばつて來て、

お餅もちが白うすの中なかから生うまれて來きます。爺ぢいやは力ちから一ぱい杵きねを振ふり上あげて、それを打うちおろす度たびに、白うすの中なかのお餅もちには大おほきな穴あながあきました。お婆ばあさんはまた腰こしを振ふりながら、爺ぢいやが杵きねを振ふり上あげた時ときを見計みはかつては穴あなのあいたお餅もちをこねました。

『べつたらここ。べつたらここ。』

その餅もちつきおとの音きを聞きくと、父とうさんは子こ供ども心ごころにもお正しやうぐわつ月づが山やまの中なかのお家うちへ來くることを知しりました。

#### 四 子供の時分こども じぶん

これから父とうさんはお前まへ達たちに、自じ分ぶんの子こ供どもの時じ分ぶんのこをお話はなしよと思おもひます。

父とうさんの幼ちひさ少な時じ分ぶんには、今いまのやうに少せう年ねんの雜ざつ誌しといふものも有ありませんでした。お前ま達たちのやうに面おも白しろいお伽とぎ噺ばなしの本ほんや、可か愛あいらしい繪ゑのついた雜ざつ誌しなぞを讀よむこと出で來きませんでした。讀よんで見みたくも、なんにもさういふお伽とぎ噺ばなしの本ほんや雜ざつ誌しが無ないんでせう、おまけに、父とうさんの生うまれたところは山やまの中なかの田ゐ舎なでせう、そのかはり、幼ちひさ少な時じ分ぶんの父とうさんには、見みるもの聞きくものがみんなお伽とぎ噺ばなしでした。



## 五 荷物(にもつ)を運ぶ馬(うま)

『もしく、お前(まへ)さんは今(いま)歸(かへ)るところですか。』

父(とう)さんがお家(うち)の門(もん)の外(そと)に出(で)て見(み)ますと馬(うま)が近(きん)所(じよ)の馬(うま)方(かた)に引(ひ)かれて父(とう)さんの見(み)て居(ゐ)る前(まへ)を通(とほ)ります。この馬(うま)は夕(ゆふ)方(かた)になると、きつと歸(かへ)つて來(く)るのです。

『さうです。今日(けふ)は荷物(にもつ)をつて隣(となり)の村(むら)まで行(い)つて來(き)ました。』

とその馬(うま)が父(とう)さんに言(い)ひました。

『お前(まへ)さんの首(くび)には好(い)い音(おと)の鈴(すず)がついて居(ゐ)ますね。』

と父(とう)さんが言(い)ますと、馬(うま)は首(くび)をふりながら、

『えゝ。わたくしあるたび私(わたし)はこの鈴(すず)が鳴(な)ります。私(わたし)はこの鈴(すず)の音(おと)を聞(き)き乍(なが)らお家(うち)の方(ほう)へ歸(かへ)つてまゐります。馬(うま)も荷物(にもつ)をつけて行(ゆ)く時(とき)はなかく骨(ほね)が折(を)れますが、一日(いち)の仕(し)事(ごと)をすまして山(や)道(みち)を歸(かへ)つて來(く)るのは樂(たの)しきものですよ。』

さう馬(うま)が言(い)つて、さも自(じ)慢(まん)さうに首(くび)について居(ゐ)る鈴(すず)を鳴(な)らして見(み)せました。父(とう)さんのお家(うち)の前(まへ)は木(き)曾(そ)街(かい)道(だう)と言(い)つて、鐵(てつ)道(だう)も汽(き)車(しゃ)もない時(じ)分(ぶん)にはみんなその道(みち)を歩(ある)いて通(とほ)りました。

高い山の上でおまけに坂道の多い所ですから荷物はこの通り馬が運びました。どうかすると五匹も六匹も荷物をつけた馬が續いて父さんのお家の前を通ることもありました。男や女の旅人に乗せた馬が馬方に引かれて通ることもありました。父さんの聲を掛けたのは、近所に飼はれて居る馬で、毎日々々隣村の方へ荷物を運ぶのがこの馬の役目でした。

馬が自分のお家へ歸つた時分に父さんはよく馳け出して行つて見ました。

『御苦勞。御苦勞。』

と馬方は馬を褒めまして、馬の脊中にある鞍をはづしてやつたり馬の顔を撫で、やつたりしました。それから馬方は大きな盥を持つて來まして、馬に行水をつかはせました。

『どうよ。どうよ。』

と馬方が言ひますと、馬は片足づゝ盥の中へ入れます。馬の行水は藁でもつて、びつしより汗になつた身體を流してやるのです。父さんは馬方の家の前に立つて、樂さうに行水をつかつて貰つて居る馬を眺めました。そして、馬の行水の始まる時分には山の中の村へ夕方方の來ることを知りました。それに氣がついては、父さんは自分の

お家の方へ歸りませうと思ひました。

六 奥山に燃える火

父さんの田舎では、夕方になると夜鷹といふ鳥が空を飛びました。その夜鷹の出る時分には、蝙蝠までが一緒に舞ひ出しました。

『蝙蝠——來い、來い。』

と言ひながら、父さんは蝙蝠と一緒に飛び歩いたものです。どうかすると狐火といふものが燃えるのも、村の夕方でした。

『御覽狐火が燃えて居ますよ。』

と村の人に言はれて、父さんはお家の前からそのチラ／＼と燃える青い狐火を遠い山の向ふの方に望んだこともありました。あれは狐が松明を振るのだとも言ひましたし、奥山の木の根が腐つて光るのを狐が口にくはへて振るのだとも言ひました。父さんは子供で、なんにも知りませんでした。あの青い美しい不思議な狐火を夢のやうに思ひました。父さんの生れたところは、それほど深い山の中でした。

## 七 水の話

とう  
父さんの田舎は木曾街道の中の馬籠峠といふところで、信濃の國の一番西の端にあつて居ました。お正月のお飾りを片付ける時分には、村中の門松や注連縄などを村のはづれへ持つて行つて、一緒にして焼きました。村の人はめいめいお餅を竿の先にさしてその火で焼いて食べたり、子供のお清書を煙の中に投げこんで、高く空にあがつて行く紙の片を眺めたりしました。火の氣と、煙とで、お清書が高くあがれば、それを書いたものの手があがると言ひました。松の燃える煙と一緒になつてお清書が高く、高くあがつて行くのは丁度風でもあげるのを見るやうでした。その正月のお飾を集めて焼く村のはづれまで行きますと、その邊にはびつくりするほど大きな岩や石が田圃の間に見えました。そこからはもう信濃と美濃の國境に近いのです。父さんの田舎は信濃の山國から平な野原の多い美濃の方へ降て行く峠の一番上のところにあつたのです。さういふ岩や石の多い峠の上に出來たお城のやうな村ですから、まるで梯子段の上にお家があるやうに、石垣をきづいては一軒づゝお家が建てゝありました。どちらを向いて

も坂ばかりでした。父さんがお隣の酒屋の方へ上つて行くにも坂、お忠婆さんといふ人の住む家の方へ降りて行くにも坂でした。

この田舎は水に不自由なところでした。谷の底の方まで行けば山の間を流れて来る谷川がなくもありませんが、人家の近くにはそれもありませんでした。そこで峠の方から清水を引いて、それを溜める場所が造つてあつたのです。何といふ好い清水が長い樋を通つて、どん／＼流れて來ましたらう。父さんが輪でも廻しながら遊びに行つて見ますと、流れて來た水が大きな箱の中に澄んで溜まつて居ます。その水が箱から溢れて村の下の方へ流れて行きます。天秤棒で兩方の肩に手桶をかついだ近所の女達がそこへ水汲に集まつて來ます。水の不自由なところに生れた父さんは特別にその清水のあるところを樂く思ひました。みんなが威勢よく水を汲んだり擔いだりするのを見るのも樂く思ひました。そればかりではありません。父さんが子供の時分から水といふものを大切に思ひ、ずつと大きくなつても水の流れて居るのを見るのが好きで、水の音を聞くのも好きなのは斯うして水に不自由な田舎に生れたからだと思ひます。

父さんのお家には井戸が掘つてありました。その井戸は柄杓で水の汲めるやうな淺い井戸ではありません。釣いても、釣いても、なか／＼釣瓶の上つて來ないやうな、深い／＼

井戸いどでした。

父とうさんの祖母おばあさんの隠居いんきよ所しょになつて居ゐた二階かいと土藏どそうの間あひだを通とほりぬけて、裏うらの木小屋きごやの方ほうへ降おりて行く石段いしだんの横よこに、その井戸いどがありました。そこも父とうさんの好きすなところで、家うちの人ひとが手桶てをけをかついで來きたり、水みづを汲くんだりする側そばに立たつて、それを見る《み》の樂たのしく思おもひました。父とうさんの幼少ちひさな時分じぶんにはお家うちにお雛ひなといふ女をんなが奉公ほうこうして居ゐまして、半はん分ぶん乳にゅう母ぼのやうに父とうさんを負おぶつたり抱だいたりして呉くれたことを覺おぼえて居ゐます。そのお雛ひなは井戸いどから石段いしだんを上あがり、土藏どそうの横よこを通とほり、桑くは島はたけの間あひだを通とほつて、お家うちの臺だい所どころまでづゝ水みづを運はこびました。

## 八 夙たご

山やまの中なかの田舎あなでは、近所きんじよに玩具おもちや賣うる店みせもありませぬ。村むらの子供こどもは夙たごなども自分じぶんで造つくりました。

父とうさんはまだ幼少ちひさかつたものですから、お家うちの爺ぢいやに手傳てつだつて貰もらひまして、造作ざうさくなく出來できる夙たごをつくりました。紙かみと絲いととはお祖母おばあさんが下くださる、骨ほねの竹たけは裏うらの竹たけ籾やぶから爺ぢいやが切きつ

て来て呉れる、何もかもお家にある物で間に合ひました。爺やが青い竹を細く削つて呉れますと、それに父さんが御飯粒で紙を張りつけまして、鰯のかたちの凧を造りました。みんなのするやうに、凧の尾には矢張紙を長く切つてさげました。

末子は學校の先生から手工を習ひませう、自分で紙の箱などを造るのは、上手に出来ても出来なくても、樂みなものでせう。父さんが自分で凧を造つたのは、丁度お前達の手工の樂みでしたよ。細い竹や紙でこしらへたものが、だん／＼凧の《たこ》のかたちに成つて行つた時は、どんなに父さんも嬉しかつたでせう。父さんはその凧に絲目をつけまして、田圃の方へ持つて行きました。

『凧よ、來い、來い、凧揚げ。』

と言つて、近所の子供も手造りにした凧を揚げに來て居ます。田圃側の枯れた草の中には、木瓜の木なぞが顔を出して居まして、遊び廻るには樂い場所でした。

『あゝ、好い凧が來ました。この凧に早く揚げて下さい。』

と凧が言ひました。父さんが大急ぎで糸を出しますと、凧は左右に首を振つたり、長い紙の尾をヒラ／＼させたりしながら、さも心持よささうに揚つて行きました。

凧は空の方に居て、父さんにいろ／＼な注文をします。『あゝわたしは面喰ひそうに

なりました。もつと糸をたぐつて下さい。』と言ふ時には、父さんは風の注文する通りに糸をたぐつてやります。『今度は左の方へ傾きさうになりました。早く右の方へ糸を引いて下さい。』と言ふ時には、父さんはまた風の言ふ通りに右の方へ糸を引いてやります。そのうちに風は風をうけて、高く高く、のして行きました。

『風さん、よく揚りましたね。そんなに高いところへ揚つたらそこいらがよく見えませう。』

と父さんが下から尋ねますと、風は高い空から見える谷底の話をしました。

『風さん、何が見えます。ほうぼうのお家が見えますか。』

『え、石の載せてあるお家の屋根から、竹藪まで見えます。馬籠の村が一目に見えます。荒町の鎮守の杜まで見えます。』

『お祖父さんの好きな恵那山は奈何でせう。』

『恵那山もよく見えます。もつと向ふの山も見えます。高い山がいくつも見えます。』

その山の向ふには、見渡すかぎり廣々とした野原がありますよ。何か光つて見える河のやうなものもありますよ。』

『それはきつとお隣の國です。』



とう  
父さんの生れた田舎は美濃の方へ降りようとする峠の上にありましたから、お家のお座敷  
からでもお隣の國が山の向ふの方に見えました。極くお天氣の好い日には、遠い近江の國  
の伊吹山まで、かすかに見えることがあると、祖父さんが父さんに話して呉れたことも  
ありました。

『お蔭で、高いところから見物しました。』

と凧が言ひました。

とう  
父さんも凧を揚たり、凧の話を聞いたりして、面白く遊びました。自分の造つた凧がそ  
んなによく揚つたのを見るのも楽しみでした。

『凧も見物で草臥れました。もうそろそろ降して下さい。』

と凧が言ふものですから、父さんが糸をたぐりますと、凧はフハくフハく空を舞ふや  
うにして、田圃のところまで嬉しさうに降りて來ました。

## 九 猿羽織

猿羽織と言つて、父さんの田舎の子どもは、お猿さんの着る袖の無い羽織のやうなものを

着きました。寒さむくなるとそれを着きました。その猿さる羽織おりを着きて雪ゆきの中なかを飛とんで歩あるくのは、丁ち度やうど木き曾その山やまの中なかのお猿さるさんが、雪ゆきの中なかを飛とんで歩あるくやうなものでした。

## 十 雪ゆきは踊をどりつゝある

父とうさんの田あな舎なかでは、何どこ處うちの家うちでも板いたで屋や根ねを葺ふいて、風かぜや雪ゆきをふせぐために大おほきな石いしが並ならべて屋や根ねの上うへに載のせてありました。なんと、あいの石いしを載のせた板いた屋や根ねは山やまの中なかの住すま居ゐらしいでせう。山やまには大おほきな檜ひの木きの林はやしもありますから、その厚あつい檜ひの木きの皮かはを板いたのかはりにして、小こ屋やの屋や根ねなぞを葺ふくこともありました。雪ゆきが來くればさういふお家うちの屋や根ねも埋うづまつてしまひ、鳥はたけも白しろくなり、竹やけ藪やぶも寝ねたやうになつてしまひます。元げん氣きな雀すずめは、そんな歌うたに頓とんち着やくなしで、自じ分ぶんのお宿やども忘われ《わす》れたやうに雪ゆきと一しよ緒じよに踊をどつて歩あるきます。

坂さか路みちの多おほい父とうさんの村むらでは、氷こほり滑りすべりの出で來きる場ばしよ所じよが行ゆく先さきにありました。村むらの子こ供どもはみな鳶とび口ぐちを持もつて凍こつた坂さか路みちを滑りすべりました。この氷こほり滑りすべりが雪ゆきの日ひの樂たのみの一しよつで、父とうさんも爺ぢいやに造つくつて貫もらつた鳶とび口ぐちを持もちだしては近きん所じよの子こ供どもと一しよ緒じよに雪ゆきの降ふる中なかで

遊びました。積つた雪を凍つた土の上に集めて、それを下駄の齒でこするうちには、白い夕、キのやうな路が出来上ります。鳶口を手にしながら坂の上の方から滑りますと、ツ―イ／＼と面白いやうに身體が行きました。もしか滑り損ねて鳶口で身體を支へ損ねた場合には雪の中へ轉げこみます。さういふ度に子供同志の揚げる笑ひ聲を聞くのも楽しみでした。自分の着物についた雪をはらつて復滑りに行くのも楽しみでした。どうかすると凍つて鏡のやうに光つて來ます。その上に白く雪でも降かゝると氷滑りの場所とも分らないことがあります。村の人達が通りかゝつて、知らずに滑つて轉ぶことなぞもありません。

父さんはお前達のやうに、竹馬に乗つて遊び廻ることも好きでした。雪の日には殊にそれが楽しみでした。大黒屋の鐵さん、問屋の三郎さんなど、といふ近所の子供が、竹馬で一緒になるお友達でした。そんな日でも、馬が荷物をつけ、合羽を着た村の馬方に引かれて雪の路を通ることもありました。父さんが竹馬の上から

『今日は。』

と言ひますと、お馴染の馬は鼻から白い氣息を出して笑ひながら

『やあ、今日は、お前さんも竹馬ですね。』

と挨拶しました。美濃の中津川といふ町の方から、いろ／＼な物を脊中につけて来て呉れるのも、あの馬でした。時には父さんの村なぞに無いめづらしい玩具や、父さんの好きな箱入の羊羹を隣の國の方から土産につけて来て呉れるのも、あの馬でした。『雪が降つて樂みでせうね。』

と馬が言ひましたが、雪が降れば馬でも嬉しいかと父さんは思ひました。山の中へ来る冬やお正月には、お前達の知らないやうな樂さもありますね。氷滑りや竹馬で凍へた手をお家の爐邊の火にあぶるのも樂みでした。

一一 庄吉爺さん

お前達は荒神さまを知つて居ませう。ほら、臺所の竈の上に祭る神さまのことを荒神さまと言ひませう。あゝして火を鎮める神さまばかりでなく、父さんの田舎では種々なものを祭りました。

繭玉のかたちを、しんこで造つてそれを竹の枝にさげて、お飼蠶さまを守つて下さる神さまをも祭りました。病氣で倒れた馬のためには、馬頭觀音を祭りました。歩いて

通る旅人の無事を祈るためには、道祖神を祭りました。

父さんは爺やに連れられて、山の神さまへお餅をあげに行つた事を覚えて居ます。湯舟に、米の粉で造つたお餅をあげて来ました。その邊は、どつちを向いても深い山ばかりで、爺やにでも隨いて行かなければ、とても幼少な時分の父さんが獨りで行かれるところではありませんでした。

山や林は父さんの故郷です。父さんのやうに大きくなつても、忘れずに居るのは、その故郷です。父さんは爺やに連れられて深い林の方へも行つて見ました。そこへ行くと爺やの伐つた木がありました。松葉の積んだのもありました。爺やはその木を背負つたり、松葉を背負つたりして、お家の木小屋の方へ歸つて來るのでした。

この爺やは庄吉といふ名で、父さんの生れない前からお家に奉公して居ました。

『よ、どつこいしよ。』

と爺やや山からかついで來た木をおろしました。木小屋のなかでそれを割りました。この爺やの大きな手は寒くなると、皸が切れて、まるで膏藥だらけのザラ／＼とした手をして居ましたが、でもその心は正直な、そして優しい老人でした。

爺ぢいやは山やまから伐きつて來きた木きを木小屋きごやにしまつて置いて、焚たきつけにする松葉まつばもしまつて置いて、要いるだけづゝお家うちの爐邊ろばたへ運びました。赤あかく々とした火ひが毎まい日にち爐邊ろばたで燃もえました。曾祖母ひいばあさん、祖父おぢいさん、祖母おばあさん、伯父おぢさん、伯母おばさんの顔かほから、奉公ほうこうするお雛ひなの顔かほまで、家うち中のものゝ顔かほは焚火たきびに赤あかく映うつりました。その樂たのしい爐邊ろばたには、長ながい竹たけの筒つづとお魚さかなの形かたと繩なはで出來できた煤すすけた自在じざい鍵かぎが釣つるしてありまして、大おほきなお鍋なべで物ものを煮にる場所ばしょでもあり家うち中ぢゅう集あつまつて御飯ごはんを食たべる場所ばしょでもありました。父とうさんの田舎あなでは寒さむくなる時まいあ朝さい芋いも焼餅やきもちといふものを焼やいて、朝あさだけ御飯ごはんのかはりに食たべました。蕎麥そばの粉こに里芋さといもの子こをまぜて造つくつたその焼餅やきもちの焦こげたところへ大根だいこんおろしをつけて焚火たきびにあたりながらホク／＼食たべるのは、どんなにおいしいでせう。その蕎麥そばの香におひのする焼やきたてのお餅もちの中なかから大おほきな里芋さといもの子こなぞが白しろく出でて來きた時は、どんなに嬉うれしいでせう。爺ぢいやは御飯ごはんの時ときでも、なんでも、草鞋わらぢばきの土足どそくのまゝで爐ろの片隅かたすみに足あしを投げ入れましたが、夕ゆふが方たし仕事ごとの濟すむ頃ころから草鞋わらぢをぬぎました。爐邊ろばたにある古ふるい屏風べうぶの側わきが爺ぢいやの夜よなべをする場所ばしょときまつて居ゐました。爺ぢいやはその屏風べうぶの側わきに新あたらしい藁わらなぞを置いて、父とうさんのために小ちひさな草履ぎょうりを造つくつたり、自じ分ぶんではく草鞋わらぢを造つくつたりしました。爺ぢいやのお伽話ときばなしはその時ときに始はじまるのでした。

とう  
父さんはこの好きな老人から、畠よりあらはれた狸や貉の話、山で飛び出した雉の話、それから奥山の方に住むといふ恐ろしい狼や山犬の話などを聞きましたが、そのうちに眠くなつて、爺やの話聞きながら爐邊でよく寝てしまひました。

## 一二 草摘みに

とう  
父さんの幼少な時分には、お錢といふものを持たせられませんでしたから、それが癖になつて、お錢は子供の持つものでないと思つて居ましたし、巾着からお錢を出して自分の好きなものを買ふことも知りませんでした。お家からお錢を貰つて行つて何か買ふのは、村の祭禮の時ぐらゐのものでした。

そのかはり、お庭にある柿や梨なぞが生りたての新らしい果物を父さんに御馳走して呉れました。祖母さんが朴の木や葉で包んで下さる※握飯の香でも嗅いだ方が、お錢を出して買ったお菓子より餘程おいしく思ひました。お家の外を歩き廻つても、石垣のところに黄色い木苺の實が生つて居るし、竹藪のかげの高い榎木の下には、香ばしい小さな實が落ちて居ました。村のはづれには「けんぼ梨」といふ木もあつて、高い枝の上に

珊瑚珠さんごじゆのやうな實みが生なる時じぶん分ぶんには木曾路きそぢを通とほる旅たび人びとはめづらしさうに仰あうむ向むいて見みて行ゆきました、その實みも取とれば食たべられて甘うまい味あぢがしました。そればかりではありません、山やまにある木きの葉は、田圃たんぼにある草くさの中なかにも『食たべられるからおあがり。』と言いつてくれるのもありました。

「スイ葉は」と言いつて、青あをい木きの葉はの生なま食たべられるものもありました。草くさでは「いたどり」や「すいこぎ」が食たべられました、あの「すいこぎ」の莖くきを採とつて來きてお家うちで鹽漬しほづけをして遊あそぶこともありました。

『手てをお出だし。私わたしもおいしいものを上あげますよ。』

父とうさんが石垣いしがきの側そばを通とほる度たびに、蛇へびいちご 苺ごが左様さうい言いつては父とうさんを誘さそひました。蛇へびいちご 苺ごは毒どくだと言いひます。それを父とうさんも聞きいて知しつて居ゐました。あの眼めのさめるやうな紅あかい蛇へびいちご 苺ごの實みが甘うまいことを言いつてよく父とうさんを誘さそひましたが、そればかりは觸さりませんでした。父とうさんの幼ちひさい時じぶん分に抱だいたり背お負おつたりして呉くれたお雛ひなは、斯かういふ山家やまがに生うまれた女をんなでした。筍たけのこの皮かわを三角かくたに疊たぐ、中なかに紫蘇しその葉はの漬つけたのを入いれて、よくそれを父とうさんに呉くれたのもお雛ひなでした。それを吸すへば紫蘇しその味あぢがして、チューク吸すふうちに、だんく筍たけのこの皮かわが赤あかく染そまつて來くるのも嬉うれしいものでした。このお雛ひなは村むらの髮結かみゆひの娘むすめでした。お雛ひなの



お父さんは數衛といふ名で、男の髮結でしたが、村中で一番汚いといふ評判の人でした。その汚い髮結の家のお雛に育てられると言つて、父さんは人に調戲されたものです。

『やあ數衛の子だ。』

こんなことを言つて惡戯好きな人達は父さんまで汚い髮結の子にしてしまひました。しかし、お雛は幼少い時分の父さんをよく見て呉れました。お雛の歌ふ子守唄は父さんの一番好きな唄でした。それを聞きながら、父さんはお雛の背中で寝てしまふこともありました。

父さんが獨りでそこいらを遊び廻る時分にはお雛に連れられてよく蓬を摘みに行つたこともあります。あたゝかい日の映つた田圃の側で、蓬を摘むのは楽しみでした。それをお家へ持つて歸つて来て、白でつけば草餅が出来ました。

一三 燕の來る頃

つばめくころ  
燕の來る頃でした。

澤山な燕が父さんの村へも飛んで來ました。一羽、二羽、三羽、四羽——とても勤  
 定することの出來ない何十羽といふ燕が村へ着いたばかりの時には、直ぐに人家へ舞ひ  
 降りようとはしません。離れさうで離れない燕の群は、細長い形になつたり、圓い輪の  
 形になつたりして、村の空の高いところを揃つて舞つて居ます。そのうちに一羽空から舞  
 ひ降りたかと思ふと、何十羽といふ燕が一時に村へ降りて來ます。そして互に嬉しさうな  
 聲で鳴き合つて、舊い馴染の軒場を尋ね顔に、思ひ／＼に分れて飛んで行きます。父さん  
 のお家へ飛んで行くのもあれば、お隣の大黒屋へ飛んで行くのもあれば、そのまた一軒  
 置いてお隣の八幡屋の方へ飛んで行くのもあります。ずっと坂の下の方の三浦屋という宿  
 屋の方へ飛んで行くのもあります。村で染物をする峯屋へも、俵屋のお婆さんの家へ  
 も、和泉屋の和太郎さんのお家へも飛んで行きました。父さんが村役場の前を通ります  
 と、そこへ來て羽を休めて居る燕もありました。燕は役場の前に建て、ある木の標柱を眺  
 めて、さも／＼遠い旅行をして來たやうな顔をして居ました。

『長野縣西筑摩郡木曾神坂村』とその木の標柱には書いてあるのです。父さんは燕  
 の話を聞いて見たいと思ひまして、いろいろに話しかけましたが、まるでこの燕は異人  
 でした。一向に言葉が通じませんでした。

『もしもし、燕さん、お前さんは一年に一度づつ、この村へ來るではありませんか。遠い國の方へ行つて居て、日本の言葉も忘れたのですか。』と父さんが言ひますと、燕は懐かしい國の言葉で物を言ひたくても、それが言へないといふ風で、唯、ペチャ、クチャ、ペチャ、クチャ、異人さんのやうな解らないことを言ひました。

燕は嬉しさに父さんを見て尻尾の羽を左右に振ながら、遠い空から漸くこの山の中へ着いたといふ話でもするらしいのでした。それを國の言葉で言へば、『皆さん、お變りもありませんか、あなたのお家の祖父さんもお健者ですか。』と尋ねるらしいのでした。燕の言ふことは早口で、

『ペチャ、クチャ、ペチャ、クチャ。』

としか父さんには聞えませんでした。

斯うした言葉の通じない燕も、村に住み慣れて、家々の軒に巢をつくり、くちばしの黄色い可愛い子供を育てる時分には、大分言葉がわかるやうになりました。燕が父さんのところへ來て何を言ふかと思ひましたら、こんなことを言ひ『い』ました。

『私共は遠い國の方から參るものですから、なか／＼言葉が覺えられません、でも、あなたがたが親切にして下さるのを、何より有難く思ひます。鶉といふ鳥や鶉といふ

とり鳥は、何百羽飛んで参りましても、みんな網や籬に掛つてしまひますが、私共にかぎつて軒先を貸して下すつたり巢をかけさせたりして下さいます。それが嬉しさに、斯うして毎年旅をして参るのです。』

一四 永昌寺

『今日には。』

と狐が永昌寺の庭へ来て言ひました。永昌寺とは、父さんの村のお寺です。そのお寺に、桃林和尚といふ年とつた和尚さんが住んで居ました。この僧侶は心の善い人でした。

『お前は何しに來ました。』

と桃林和尚が尋ねますと、狐の言ふことには、

『わたしはお寺を拜見にあげりました。』

とうとう父さんが初めてあがつた小學校も、この和尚さんの住むお寺の近くにありました。小學校の生徒に狐がついたと言つて、一度大騒ぎをしたことがありました。父さんはそ

の時はまだ幼少くてなんにも知りませんでした。その狐のついたといふ生徒は口から泡を出し、顔色も蒼ざめ、ぶる／＼震へてしまひました。何度も／＼も名前を呼ばれて、漸くその生徒は正氣に復つた事がありました。桃林和尚はその話も聞いて知つて居りましたから、いづれ狐がまた何か悪戯をするためにお寺へ訪ねて來たに違ひないと、直に感づきました。

『和尚さん、和尚さん、こちらは大層好いお住居ですね。この村に澤山お家があります。りまして、こちらにかなふところはあります。村中第一の建物です。こんなお住居に被入しやる和尚さんは仕合せな方ですね。』

斯う狐は言ひました。狐は調戲ふつもりでわざと桃林和尚の機嫌を取るやうにしました。賢い和尚さんはなかくその手に乗りませんでした。

『ハイ、御覽の通り、村では大きな建物です。しかしこのお寺は村中の人達の爲めにあるのです。私はこゝに御奉公して居るのです。お前さんは私がこの住居の御主人のやうなことを言ひますが私は唯この番人です。』

斯う桃林和尚が答へましたので、狐は頭を掻き／＼裏の林の方へこそ／＼隠れて行きました。

桃林和尚が御奉公して居た永昌寺は、小高い山の上にありました。そのお寺の高い屋根は村中の家の一番高いところでした。狐が来て言つた通り、村中一番の建築物でもありません。そこで撞く鐘の音は谷から谷へ響けて、何處の家へも傳はつて行きました。その鐘の音は、年とつた和尚さんの前の代にも撞き、そのまた前の代にも撞いて來たのです。もう何百年といふことなく、古い鐘の音が山の中で鳴つて居たのです。永昌寺のある山の中途には、村中のお墓がありました。こんもりと茂つた杉の林の間からは、石を載せた村の板屋根や、柿の木や、竹藪や、窪い谷間の畠まで、一目に見えました。そこには父さんのお家の御先祖さま達も、紅い椿の花なぞの咲くところで靜かに眠つて居りました。

### 一五 お茶をつくる家

雀が父さんのお家へ覗きに來ました。丁度お家ではお茶をつくる最中でしたから、雀がめづらしさうに覗きに來たのです。

『お前さんのお家ではお茶をつくるんですか。』

と雀すずめが言いひますから、

『え、私わたしの家うちではお茶ちやを買かつたことが有ありません。毎まい年ねん自じ分ぶんの家うちでつくりま

と父とうさんが話はなしてやりまし

て見みせました。そこではお家うちの畠はたけで取とれたお茶ちやの葉はを煮にて居ゐる人ひとが有あります。あ

の焙ほいろ爐ろの方ほうを御ご覽らんと言いつて見みせました。そこではお釜かまから出だしたお茶ちやの葉はを

茶ちやの葉はを兩りやう手てで揉もんで居ゐる人ひとが有あります。そこでは火ひの上うへにか

けたお茶ちやの葉はを御ご覽らんと言いつて見みせました。そこでは火ひの上うへにか

『チユウ、チユウ。』

とめづらしいことすずめの好すきな雀すずめが鳴なきました。そしてめづらしいことすずめでさへあれば、雀すずめは喜よろこ

びました。

お家うちでは祖おばあ母あさんや伯おばあ母あさんやお雛ひなまで手てぬくひ拭かぶを冠かぶりまして、伯おち父ちさんや爺ぢいやと一しよ緒はたらに働はたら

きました。近きんぢよ所よから手てつだ傳だひに來きて働はたらく人ひとも有ありました。好よいお茶ちやの香かほがするのと、家いへ中ぢう

みんな働はたらいて居をるので、父とうさんも雀すずめと一しよ緒しよにそこいらを踊をどつて歩あるきました。

父とうさんのお家うちではこのお茶ちやばかりでなく食たべる物ものも着きる物ものも自じ分ぶんのところで造つくりました。

お味み噌そも家うちで造つくり、お醬しやうゆ油ゆも家うちで造つくり、祖おばあ母あさんや伯おばあ母あさんの髪かみにつける油あぶらまで庭にはつばきの椿つばき

の樹の實を絞つて造りました。林にある小梨の皮を取つて来て、黄色い汁で絲まで染めました。父さんの子供の時分には祖母さんの織つて下さる着物を着、爺やの造つて呉れる草履をはいて、それで學校へ通ひました。さうして、この手造りにしたものの、樂みを父さんに教へて呉れたのは、祖母さんでした。

祖母さんは働くことが好きで、みんなの先に立つてお茶もつくりましたし、着物も根氣に織りました。祖母さんは隣村の妻籠といふところから、父さんのお家へお嫁に來たひと、ひいおばあ人で、曾祖母さんほどの學問は無いと言ひましたが、でもみんなに好かれました。林檎のやうに紅い祖母さんの頬ぺたは、家中のものゝ心をあたゝめました。

祖母さんの着物を織る場所はお家の玄關の側の板の間と定つて居ました。そのお庭の見える明るい障子の側に祖母さんの腰掛て織る機が置いてありました。

『トン／＼ハタリ、トンハタリ。』祖母さんの箴が動く度に、さういふ音が聞こえて來ます。父さんが玄關の廣い板の間に居て、その箴の音を聞きながら遊んで居りますと、そこへもよくめづらしいもの好きの雀が覗きに來ました。

一六 梨や柿はお友達



とう 父さんのお家の庭にはいろ／＼な木が植てありました。父さんはその木を自分のお友達  
 のやうに想つて大きくなりました。お前達の祖父さんのお部屋の前にあつた古い大きな  
 まつ 松の樹も、表の庭にはあつた椿の木もみんな父さんのお友達でした。その椿の木の側には  
 なし 梨の木もあつて、毎年大きな梨がなりました。  
 ああ あの青い梨の實のなつた樹の下へは父さんもよく見に行つたものです。

『もう食べてもいいかい。』

と父さんが梨の木に聞きに行きますと

『まだ早い、まだ早い。』

と梨の木は言つて、なか／＼食べてもいい／＼とは言ひませんでした。そして、その梨の實が  
 おほ 大きくなつて、色のつく時分には、丁度御祝言の晩の花嫁さんのやうに、白い紙  
 袋をかぶつて了りました。これは蜂が来て梨をたべるものですから、蜂をよけるために  
 かみぶくろ 紙袋をかぶせるのです。お勝手の横には祖父さんの植ゑた桐の木がありました。その  
 きり 桐の木の下は一面に桑畑でした。お隣の高い石垣や白い壁などがそこへ行くとよく  
 み 見えました。桑の實の生る時分には父さんは桑の木の側へ行つて

『食べてもいいかい。』

とたづねますと、桑の木は見かけによらない優しい木でした。

『あゝ、いゝとも。いゝとも。』

と言つて呉れました。父さんはうれしくて、あの桑の木に生る紫色の可愛い小さな實を枝からちぎつて口に入れました。

土蔵の前には、柿の木もありました。父さんはよくその柿の木の下へ行つて遊びました。

柿の木はまた梨や桐の木とちがつて、にぎやかな木で、父さんが遊びに行く度に何かしら集めたいやうなものが木の下に落ちて居ました。柿の花の咲く時分に行く、あの甘い香ひのする小さな花が一ぱい落ちて居ます。實の生る時分に行く、あの帯のついた青い小さな柿が澤山落ちて居ます。そろゝ木の葉の落ちる時分に行く、大きな色のついた柿の葉がそこにもこゝにも落ちて居ます。父さんはそれを拾集めるのが楽しみでした。それに他のお家の柿の木へは登らうと思つても登れませんでした、自分のお家の柿の木ばかりは悪い顔もせずに登らせて呉れました。父さんは枝から枝をつたつて登つて、時にゆすつたりしても柿の木は怒りもしないのみか、『もつと遊んでお出。もつと遊んでお出。』と父さんに言ひました。

一七 鳥獸もお友達

山の中に育つた父さんは、いろいろな木をお友達のように思つて大きくなつたばかりではありませぬ。お前達の好きなお伽話の本や雑誌の中に出て来るやうな、鳥や獸まで幼少い時分の父さんにはお友達でした。

お家にはおいしい玉子を御馳走して呉れる鶏が飼つてありました。父さんが裏庭に出て、桐の木の下あたりを歩き廻つて居ますと、その邊には鶏も遊んで居ました。

『コツ、コツ、コツ。』

と鶏は父さんを見かける度に挨拶します。時には鶏はお友達のものに言つて、白い羽や茶色な羽の抜けたのを父さんに置いて行つて呉れることもありました。

めづらしいお客さまでもある時には、父さんのお家では鶏の肉を御馳走しました。山家のことですから、鶏の肉と言へば大した御馳走でした。その度にお家に飼つてある鶏が減りました。あの締められた首を垂れ眼を白くしまして、羽をむしられる鶏を見て居ますと、父さんはお腹の中でハラ／＼しました。これはお客さまの御馳走ですから仕方が無いと思

ひましたが、近所のお家では、鬪鶏や鶏を締殺して煮て食ふといふことをよくやりました。村には随分悪戯の好きな人達がありました。さういふ人達は生きて居る鬪鶏の毛をむしりまして、煮て食ふ前に追ひ廻して面白がつたものです。あの赤はだかに毛を抜かれた鳥がヒヨイ／＼飛び歩くのを見るほど、むごいものは無いと思ひました。父さんは子供心にも、そんな悪戯をする村の人達を何程憎んだか知れません。お家の土蔵には年をとつた白い蛇も住んで居りました。その蛇は土蔵の『主』だから、かまはずに置けと言つて、石一つ投げつけるものもありませんでした。不思議にもその年とつた蛇は動物園にでも居るやうに温順しくして居てついで悪戯をしたといふことを聞きます。父さんはめつたにその蛇を見ませんでした。どうかすると日の映つた土蔵の石垣の間に身體だけ出しまして、頭も尻尾も隠しながら日向ぼっこをして居るのを見かけました。

この土蔵について石段を降りて行きますと、お家の木小屋がありました。木小屋の前には池があつて石垣の横に咲いて居る雪の下や、そこいらに遊んで居る蜂や蛙などが、父さんの遊びに行くのを待つて居りました。裏木戸の外へ出て見ますと、そこにはまたお稻荷さまの赤い小さな社の側に大きな栗の木が立つて居りました。風でも吹いて栗の枝の揺れる

やうな朝あさに父とうさんがお家うちから馳かけ出して行いつて見みますと『誰たれも来こないうちうちに早はやくお拾ひろひ。』と栗くりの木きが言いつて、三みつつづゝ一くみ組くみになつた栗くりの實みの毬いがと一しよ緒しよに落おちたのを父とうさんに拾ひろはせて呉くれました。高たかいところを見みると、ワわンと口くちを開あいた栗くりの毬いがが枝えだの上うへから父とうさんの方ほうを笑わらつて見みて居ゐまして、わわぎと落おちた栗くりの在ある場ばしよ所をも教をしへずに、父とうさんに探さがし廻まはらせては悦よろこんで居をりました。

『あんなどころに落おちて居ゐるのが、あれが見みえないのかナア。』とは栗くりの毬いががよく父とうさんに言いふことでした。栗くりの木きは花はなからして提ちやう灯ちんをぶらさげたやうに滑こつ稽けいな木きでしたし、どうかすると青あをい栗くり虫むしなぞを落おしてよこして、人ひとをびつくりさせることの好すきな木きでしたが、でも父とうさんの好すきな木きでした。

## 一八 榎え木の實み

お家うちの裏うらにある榎え木の實みが落おちる時じふん分ぶんでした。父とうさんはそれを拾ひろふのを樂たのみにして、まだあの實みが青あをくて食たべられない時じふん分ぶんから、早はやく紅あかくなれ早はやく紅あかくなれといつて待まつて居ゐました。

爺ぢいやは山やまへも木きを伐きりに行くし畑はたけへも野菜やさいをつくりに行つて、何なんでもよく知しつて居ゐましたから、

『まだ榎木えのきの實みは澁しぶくて食たべられません。もう少すこしお待まちなさい。』とさう申ましました。

父とうさんは榎木えのきの實みの紅あかくなるのが待まつて居ゐられませんでした。爺ぢいやが止とめるのも聞きかずに、馳かけ出して木きの實みを拾ひろひに行ゆきますと、高たかい枝えだの上うへに居ゐた一羽はの榎鳥かしどりが大おほきな聲こゑを出だして、

『早はや過ぎた。早はや過ぎた。』と鳴なきました。

父とうさんは、枝えだに生なつて居ゐるのを打うち落おつともりで、石いしころや棒ぼうを拾ひろつては投なげつけました。その度たびに、榎木えのきの實みが葉はと一しよ緒しょになつて、パラ／＼パラ／＼落おちて來きましたが、どれもこれも、まだ青あをくて食たべられないのばかりでした。

そのうちに復また父とうさんは出で掛かけて行ゆきました。『大だい丈夫ぢやうぶ、榎木えのきの實みはもう紅あかくなつて居ゐる。』と安あん心しんして、ゆつくり構かまへて出で掛かけて行ゆきました。高たかい枝えだの上うへに居ゐた榎鳥かしどりがまた大おほきな聲こゑを出だしまして、

『遅おそ過ぎた。遅おそ過ぎた。』と鳴なきました。

父とうさんは、しきりと木きの下したを探さがし廻まはりましたが、紅あかい榎木えのきの實みは一ひとつも見みつかりませんで

した。ゆつくり出掛けて行くうちに、木の下に落ちて居たのを皆な他の子供に拾はれてしまひました。父さんがこの話を爺やにしましたら、爺やがさう申しました。

『一度はあんまり早過ぎたし、一度はあんまり遅過ぎました。丁度好い時を知らなければ、好い榎木の實は拾はれません。私とその丁度好い時を教へてあげます。』と申しました。

ある朝、爺やが父さんに『さあ早く拾ひにお出なさい、丁度好い時が來ました。』と教へました。その朝は風が吹いて、榎木の枝が揺れるやうな日でした。父さんが急いで木の下へ行きますと、榎鳥が高い木の上からそれを見て居まして、

『丁度好い。丁度好い。』と鳴きました。

榎木の下には、紅い小さな球のやうな實が、そこにも、こゝにも、一ぱい落ちこぼれて居ました。父さんは木の周圍を廻つて、拾つても、拾つても、拾ひきれないほど、それを集めて樂みました。

榎鳥は首を傾げて、このありさまを見て居ましたが、

『なんとこの榎木の下には好い實が落ちて居ませう。澤山お拾ひなさい。序に、私も一つ御褒美を出しますよ。それも拾つて行つて下さい。』と言ひながら青い斑の入つた小さ

な羽を高い枝の上から落してよこしました。  
 父さんは榎木の實ばかりでなく、檀鳥の美しい羽を拾ひ、おまけにその大きな榎木の下で、『丁度好い時。』まで覺えて歸つて來ました。

一九 木曾の蠅

木曾は蠅の多いところですよ。

木曾には毎年馬市が立つくらゐに、諸方で馬を飼ひますから、それで蠅が多いといひます。

蠅は何にでも行つて取りつきます。荷物をつけて通る馬にも取りつけば、旅人の着物にも取りつきます。蠅は誰とでも直ぐ懇意になります、そのかはり誰にでもうるさがるれます。こんなうるさい蠅でも、道連れとなれば懐かしく思はれたかして、木曾の蠅のことを發句に讀んだ昔の旅人もありましたつけ。



にて、違ふもの——蠅と蝸。蠅はうるさがられ、蝸は恐がられて居ます。蝸は人をも馬をも刺します。あの長くて丈夫な馬の尻尾の房々とした毛は、蝸を追ひ拂ふ《はら》の役に立つのです。父さんが幼少な時分に晝寝をして居ますと、どうかするとこの蝸に食はれることが有りました。その度に、お前達の祖父さんが大きな掌で、蝸を打ち懲して呉れました。

## 二一 木曾馬

木曾のやうに山坂の多いところには、その土地に適した馬があります。いくら體格のいい立派な馬でも、平地にばかり飼はれた動物では、木曾のやうな土地には適しません。そこで、石ころの多い坂路を歩いても疲れないやうな強い脚の力が、木曾生れの馬には自然と具はつて居るのです。

木曾馬は小さいが、足腰が丈夫で、よく働くと言つて、それを買ひに来る博勞が毎年諸國から集まります。博勞とは馬の賣買を商賣にする人のことです。木曾

の山地に育つた眼付の可愛らしい動物がその博勞に引かれながら、諸國へ働きに出るのです。

## 二二 御嶽参り

『チリンく。チリンく。』

山が夏らしくなると、鈴の音が聞えるやうに成ります。御嶽山に登らうとする人達が幾組となく父さんのお家の前を通るのです。馬に乗るか、籠に乗るか、さもなければ歩いて旅をした以前の木曾街道の時分には、父さんの生れた神坂村も驛の名を馬籠と言ひました。汽車や電車の着くところが今日のステエシヨンなら、馬や籠の着いた父さんの村は昔の木曾街道時分のステエシヨンのあつたところです。ほら、何々の驛といふことをよく言ふでは有りませんか。木曾の山の中にあつた小さな馬籠驛でも、言葉の意味に變りは無いのです。丁度、お隣りで美濃の國の方から木曾路へ入らうとする旅人のためには、一番最初の入口のステエシヨンにあつて居たのが馬籠驛です。御嶽参りが西の方から斯の木曾の入口に着くには、六曲峠といふ峠を越して來な

ければなりません。そこが信濃と美濃の國境で、父さんの村のはづれに當つて居ます。馬籠の驛まで来れば御嶽山はもう遠くはない、そのよろこびが皆の胸にあるのです。あの白い着物に、白い鉢巻をした山登りの人達が、腰にさげた鈴をちりん／＼鳴らしながら多勢揃つて通るのは、勇しいものでした。

### 二三 芭蕉翁の石碑

お前達は芭蕉翁の名を聞いたことが有りませう。あの芭蕉翁の木曾で讀んだ發句が石に彫りつけてあります。その古い石碑が馬籠の村はづれに建て、あります。美濃の國境に近いところに、それがあります。

『朝を思ひ、また夕を思ふべし。』  
と芭蕉翁は教へた人です。

### 二四 お百草

おんたけさんの方から歸る人達は、お百草といふ薬をよく土産に持つて來ました。お百草は、あの高い山の上で採れるいろ／＼な草の根から製した練薬で、それを竹の皮の上に延べてあるのです。苦い／＼薬でしたが、お腹の痛い時などにそれを飲むとすくなまりました。お薬はあんな高い山の土の中にも藏つてあるのですね。

## 二五 檜木笠

麥藁でさへ帽子が出来るのに、檜木で笠が造れるのは不思議でもありません。木曾は檜木の名所ですから、あの木を薄い板に削りまして、笠に編んで冠ります。その笠の新しいのは、好い檜木の香氣がします。木曾の檜木は材木として立派なばかりでなく、赤味のある厚い木の皮は屋根板の代りにもなります。まあ、あの一ト擁へも二ト擁へもあるやうな檜木の側へ、お前達を連れて行つて見せたい。

## 二六 ふるさとの言葉

やまはやしとう  
 山や林は父さんのふるさとですと、お前達にお話しましたらう。山や林ばかりでなく、  
 言葉も父さんのふるさとです。邊鄙な山の中の村ですから、言葉のなまりも鄙びては居ま  
 すが、人の名前の呼び方からして馬籠は馬籠らしいところが有ります。たとへば、末子の  
 やうなちひさな女の子を呼ぶにも、

『末さま。』

と言つたり、もつと親しい間柄で呼ぶ時には、

『末さ』

と言つたりしまして、鄙びた言葉の中にも何處か優しいところが無いでもありません。

父さんの田舎には『どうねき』などといふ言葉もあります。もう仕末におへないやうな  
 のことを『どうねき』と言ひます。こんな言葉は木曾にだけ有つて、他の土地には無いの  
 だらうかと思ひます。それから、『わやく』といふやうな言葉もあります。『いたずらな  
 子供』といふところを『わやくな子供』など、言ひます。  
 ふるさとの言葉はこひしい。それを聞くと、父さんは自分の子供の時分に歸つて行くやう  
 な氣がします。お前達の祖父さんでも、祖母さんでも、みんなその言葉の中に生きてい  
 らつしやるやうな氣がします。

## 二七 お百姓の苗字

とう  
父さんの田舎の方には働くことの好きなお百姓が住んで居ます。今でこそあの人達  
に苗字の無い人はありませんが、昔は庄吉とか、春吉とかの名前ばかりで、苗字の無い  
ひとたちが澤山あつたさうです。明治のはじめを御維新の時と言ひまして、あの御維  
新の時から、どんなお百姓でも立派な苗字をつけることに成つたさうです。

とう  
父さんのお家にも出入のお百姓が居まして、お餅をつくとか、お茶をつくるとかい  
ふ日には、屹度お手傳ひに来て呉れました。あの人達はお前達の祖父さんのことを  
『お師匠さま、お師匠さま』と呼んで居ました。あの人達が苗字をつける時のこと  
を今から思ひますと、

『お師匠さま、孫子に傳はることでございますから、どうかまあ私共にも好きさう  
な苗字を一つお願ひ申します。』

か  
斯うもあつたらうかと思ひます。そして、大脇の脇の字を分けて貰ふとか、蜂谷の谷の  
字を分けて貰ふとかして、いろ／＼な苗字が村にふえて行つたらうかと思ひます。

二八 きつね  
 狐の身上話

お稻荷さまは五穀の神を祀つたものですとか。五穀とは何と何でせう。米に、麥に、粟に、黍に、それから豆です。粟は粟餅の粟、黍はお前達のお馴染な桃太郎が腰にさげて居る黍團子の黍です。父さんのお家の裏にも、斯のお百姓の神様が祀つてあります。赤い鳥居の奥にある小さな社がそれです。二月初午の日には、お家の爺やが大きな太鼓を持出して、その社の側の櫻の枝の木に掛けますと、そこへ近所の子供が集まりました。父さんもその太鼓を叩くのを楽しみにしたものです。お前達はあの繪馬を知つて居ますか。馬の繪をかけた小さな額が諸方の社に掛けてあるのを知つて居ますか。あの額の中には『奉納』といふ文字と、それを進げた人の生れた年などが書いてあるのに気がつきましたか。父さんのお家の裏に祀つてあるお稻荷さまの社にも、あの繪馬がいくつも掛つて居ました。それから、白い狐の姿をあらはした置物も置いてありました。その白狐はあたりまへの狐でなくて、寶珠の玉を口にくはへて居ました。

『お前さんがお稻荷さまですか。』

と父さんがその狐にきいて見ました。さうしましたら白狐の答へるには、

『どうしまして。私はお稻荷さまの使ひですよ。この社の番人ですよ。私もこれで若い時分には随分いたずらな狐でして、諸方の島を荒しました。一體、私の幼少な時分

には、ごく弱かつたものですから、この白狐はこれでも育つかしら、と皆に言はれたくらゐださうです。その私を可哀さうに思つて、親狐は私の言ふなりに育て、呉れま

したとか。私は他の言ふことなぞを聞かないで、自分のしたい事をしました。鶏が食べなければ、鶏を盗んで來ました。そんな眞似をして、もう我儘一ぱいに振舞つて居ります

うちに、だん／＼私は獨りぼつちに成つてしまひました。誰も私とは交際はなくなりま

した。私の眼が覺める時分には、誰も私の言ふことを本當にして呉れる者はありません

でした。御覽の通り、私は今、お稻荷さまの社の番人をして居ます。私のやうな狐でも

生れ變つたやうになれば、斯うして社の番人をさせて頂けるのです。私がもう若い時分のやうな悪戯な狐でない證據には、この私の口を御覽になつても分ります。私がお稻荷さまのお使ひをして歩く度に、この口にくはへて居る寶珠の玉が光ります。』



二九 生徒さん、今日は

むらの学校の生徒が石垣の間の細い道を歸つて來ますと、こちらの石垣から向ふの石垣の方へ通りぬけようとする鼠がありました。丁度、村では悪戯をした鼠の噂が傳はつて居る頃でした。いかにそゝツかしい山家の鼠でも、そこに寝て居る女の人の鼻を間違へて、お芋かなんかのやうに食べようとしたなんて、そんなことはめつたに聞かない悪戯ですから。

学校の生徒に逢つた鼠は賢い鼠でした。他所の鼠の悪戯から、自分までその仕返しをされては堪らないと思ひましたから、先づ自分の鼻を大事さうにおさへて居まして、それから斯う挨拶しました。

『生徒さん、今日は。』

三〇 黒い蝶蝶

ある日のことでした。父さんはお家の裏木戸の外をさん／＼遊び廻りまして、木戸のところまで歸つて來ますと、高い枳殻の木の上方に卵でも産みつけようとして居るやうな大きな黒い蝶々を見つけました。

いろ／＼可愛らしい蝶々も澤山ある中で、あの大きな黒い蝶々ばかりは氣味の悪いものです。あれは毛蟲の蝶々だと言ひます。何の氣なしに父さんはその蝶々を打ち落とすつもりで、木戸の内の方から長い竹竿を探して來ました。ほら、枳殻といふやつは、あの通りトゲの出た、枝の込んだ木でせう。父さんが蝶々をめぐけて竹竿を振る度に、それが枳殻の枝を打つて、青い葉がバラ／＼落ちました。

そのうちに蝶々は父さんの竹竿になやまされて、手傷を負つたやうでしたが、まだそれでも逃げて行かうとはしませんでした。そこいらにはもう誰も人の居ない頃で、木戸に近いお稻荷さまの小さな社から、お家の裏手にある深い竹藪の方へかけて、何もかも、ひっそりとして居ました。大きな蝶々だけが氣味の悪い黒い羽をひろげて、枳殻のまはりを飛んで居ました。それを見ると、父さんはその蝶々を殺してしまはないうちは安心の出來ないやうな氣がして、手にした竹竿で、滅茶々に枳殻の枝の方を打つて置いて、それから木戸の内へ逃げ込みました。

未だに父さんはあの時のことを忘れません。母屋の石垣の下にある古い池の横手から、ひっそりとした木小屋の前を通り、井戸の側の石段を駆け登るやうにしまして、祖母さん達の居る方へ急いで歸つて行つた時のことを忘れません。

それにつけても、父さんはある亞米利加人の話を思ひ出します。

その亞米利加人がまだ子供の時分に龜の子を打つた話を思ひ出します。生れて初めて『悪い』といふ事をほんたうに知つた、自分で悪いと思ひながら復た棒を振上げ／＼して龜の子を打つのに夢中になつてしまつた、あんな心持は初めてだ、さう亞米利加人の話の中に書いてあつたことを思ひ出します。その亞米利加人が母親から言はれた言葉を引いて、あれが自分の『良心の眼ざめ』だ、自分が一生の中のどんな出来事でもあんなに深く長續きのして残つたものはない、とその話にも言つてありましたつけ。

### 三一 梨の木の下

子供が片足づゝ揚げて遊ぶことを、東京では『ちんくまごく』と言ひませう。土地によつては『足拳』と言ふところも有るさうです。父さんの田舎の方ではあの遊び

のことを『ちんぐら、はんぐら』と言ひます。

問屋の三郎さんは近所の子供の中でも父さんと同い年でして、好い遊び友達でした。父さんがお家の表に出て遊んで居りますと、何時でも坂の上の方から降りて来て一緒に成るのは、この三郎さんでした。二人は片足づゝ揚げまして、坂になつた村の往來を

『ちんぐら、はんぐら』とよく遊びました。

ある日の夕方、父さんは何かの事で三郎さんと争ひまして、この好い遊び友達を泣かせてしまひました。三郎さんの祖母さんといふ人は日頃三郎さんを可愛がつて居ましたから、大層立腹して、父さんのお家へ振込込んで來たのです。問屋の祖母さんと言へば、なか／＼負けては居ない人でしたからね。

父さんはお家へ歸ればきつと叱られることを知つて居ましたから、しよんぼりと門の内まで歸つて行きました。お家には廣い板の間の玄關と、田舎風な臺所の入口と、入口が二つになつて居ましたが、その臺所の入口から見ますと、爐邊ではもう夕飯が始まつて居ました。ところが誰も父さんに『お入り』と言ふ人がありません。『早く御飯をおあがり』と言つて呉れる者も有りません。父さんは自分のしたことで、こんな

に皆を怒らせてしまつたかと思ひました。そのうちに、

『お前はそこに立つてお出で。』

といふ伯父さんの聲を聞きつけました。あのお前達の伯父さんが、父さんには一番年長の兄さんに當る人です。父さんは問屋の三郎さんを泣かせた罰として、庭に立たせられました。あかくと燃える楽しさうな爐の火も、みんなが夕飯を食べるさまも、庭の梨の木の下からよく見えました。爺やは心配して、父さんを言ひなだめに來て呉れましたが、父さんは誰の言ふ事も聞き入れずに、みんなの夕飯の済むまでそこに立ちつくしました。

斯ういう場合に、いつでも父さんを連れに來て呉れるのはあのお雛で、お雛は父さんのために御飯までつけて呉れましたが、到頭その晩は父さんは食べませんでした。

愚かな父さんは、悪い事でも悪い事でもそれを自分でして見た上でなければ、その意味をよく悟ることが出来ませんでした。そのかはり、一度懲りたことは、めつたにそれを二度する氣にならなかつたのは、あの梨の木の下に立たせられた晩のことをよく、忘れずに居たからであります。

三二 翫具は野にも畠にも

とう  
父さんの幼少い時のやうに山の中に育つた子供は、めつたに翫具を買ふことが出来ませ  
ん。假令、欲しいと思ひましても、それを賣る店が村にはありませんでした。

翫具が欲しくなりますと、父さんは裏の竹藪の竹や、麥、畠に乾してある麥藁や、  
それから爺やが野菜の畠の方から持つて来る茄子だの南瓜だの、中へよく探しに行きま  
した。

爺やが畠から持つて来る茄子は、父さんに蒂を呉れました。その茄子の蒂を兩足の親  
指の間にはさみまして、爪先を立て、歩きますと、丁度小さな沓をはいたやうで、  
嬉しく思ひました。

南瓜も父さんに、蒂を呉れました。

『御覽、私の蒂の堅いこと。まるで竹の根のやうです。これをお前さんの兄さんのところ  
へ持つて行つて、この裏の平らなところへ何か彫つてお貰ひなさい。それが出来たら、紙  
の上へ押して御覽なさい。面白い印行が出来ますよ。』

と南瓜が教へて呉れました。

裏の竹藪の竹は父さんに竹の子を呉れました。それで竹の子の手桶を造れ、と言つて呉

れ《く》ました。

『こいつも、おまけだ。』

と細く竹の割つたのまで呉れてよこしました。その細い竹を削りまして、竹の子の手桶に差しますと、それで提げられるやうに成るのです。水も汲めず。父さんは表庭の梨の木や椿の木のあたりへ小さな川のかたちをこしらへました。寄せ集めた砂や土を二列に盛りまして、その中へ水を流しては遊びました。竹の子の手桶で提げて行つた水がその小さな川を流れるのを楽しみました。

むぎばたけ 畠に熟した麦は、父さんに穂先の方の細い麦藁と、胴中の方の太い麦藁とを呉れました。

『是をどうするんですか。黄色い麦藁でなけりや不可んですか。』  
と父さんが聞きましたら、麦の言ふには、

『ナニ、青いんでもかまひませんが、なるなら黄色い方がいい。麦は熟するほど丈夫ですからね。この細い麦藁の穂先の方を軽く折つてお置きなさい。氣をつけてしないと、折れて、とれてしまひますよ。それから太い麦藁の節のある下のところを一寸ばかりお前さんの爪でお裂きなさい。これも氣をつけてしないと、みんな裂けてしまひますよ。太

い 麥藁には必ず一方に節のあるのが要ります。それが出来ましたら、細い方の麥藁  
 を太い麥藁の裂けたところへ差し込むやうになさい。』  
 成程麥の言ふ通りにしましたら、子供らしい翫具が出来ました。細い麥藁を下から  
 ひく度に、麥の穂先が動きまして、『今日は、今日は』と言ふやうに見えました。  
 父さんは、種々な翫具が野にも畠にもある事を知りました。竹藪から取つて來た青  
 い竹の子、麥、畠から取つて來た黄色い麥藁で、翫具を手造にする事の言ふに言は  
 れぬ楽しい心持を覺えました。  
 畠の隅に堤燈をぶらさげたやうな酸醬が、父さんに酸醬の實を呉れまして、その  
 心を出してしまつてから、古い筆の軸で吹いて御覽と教へて呉れました。筆の軸は先の方  
 だけを小刀か何かで幾つにも割りまして、朝顔のかたちに折り曲げるといふのです。  
 その受口へ玉のやうにふくらめた酸醬をのせ、下から吹きましたら、軽い酸醬がく  
 るくと舞ひあがりました。そして朝顔なりの管の上へ面白いやうに落ちて來ました。

三三 旅の飴屋さん



とう  
父さんの村へも、たまには飴屋さんが通りました。旅の飴屋さんは、天平棒でかついて  
きた荷を村の石垣の側におろして、面白をかしく笛を吹きました。

なんと、飴屋さんの上手に笛を吹くこと。飴屋さんは棒の先に巻きつけた飴を父さんにも賣つて呉れまして、それから斯う言ひました。

『さあ、おいしい飴ですよ。これを食べ、おとなしくして居て下さると、復た私が飴を  
かついで来てあげますよ。』

日に焼けて旅をして歩く斯の飴屋さんは、何處か遠いところからかついで来た荷を復た肩  
に掛けて、笛を吹きくく出掛けました。

あの飴屋さんの吹く笛は、そこいらの石垣へ浸みて行くやうな音色でした。

### 三四 水晶のお土産

ある日、父さんは人に連れられて梵天山といふ方へ行きました。赤い躑躅の花などの咲  
いて居る山路を通りまして、その梵天山へ行つて見ますと、そこは水晶の出る山  
でした。父さんはめづらしく思ひまして、あちこちと見て歩いて居ますと、路ばたに大き

な岩がありました。その岩が父さんに、彼處を御覽、こゝを御覽、と言ひまして、半分土のついた水晶がそこいらに散らばつて居るのを指して見せました。

『あそこにも水晶の塊がありますよ。』

とまた岩が父さんに指して見せました。その水晶は千本濕地といふ茸のかたまつて生えたやうに、枝に枝がさしたやうになつて居まして、その枝の一つ一つが、みんな水晶の形をして居ました。

『こんなところから水晶が出るんですか。』

と父さんが聞きましたら、

『えゝ、さうです。水晶はみんな斯うして生れて來ます。人は遠いところにはばかり眼をつけて、足許に落ちて居る寶石を知らずに居ますよ。さういふお前さんは、この山は初めてゝすか。よく來て下さいました。山の土産に、あそこに落ちて居る美しい水晶でも一つ拾つて行つて下さい。』

斯うその岩が答へました。

父さんはそこいらを探し廻りまして、眼についた水晶の中でも一番光つたのを土産に持つて歸りました。

## 三五 雄鷄の冒険

若い雄鷄がありました。

他の鷄と同じやうに、この雄鷄も人の家に飼はれて大きくなりました。小さな雛ツ子の時分から、雄鷄は自分で飛べないものとばかり思つて居ましたが、だん／＼大きくなるうちに、自分に生えて居る羽を見てびっくりしました。

雄鷄はまだ若くて元氣がありましたから、こんな立派な羽があるなら一つこれで飛んで見たいと思ふやうに成りました。そこで林の方へ出掛けて行きまして、他の鳥と同じやうに飛ばうとしました。林には百舌が遊んで居ました。百舌は雄鷄の方を見ては笑ひました。そこへ鷓も舞つて來ました。鷓は雄鷄の方を見て、百舌と同じやうに笑ひました。何度も何度も雄鷄は木の枝へ上りまして、そこから飛ばうとしましたが、その度に羽をばた／＼させて舞ひ降りてしまひました。

百舌には笑はれる、鷓にも笑はれる、そのうちに雄鷄は餌を欲しくなりましたが、林の中にある木の實や虫はみんな他の鳥に早く拾はれてしまひました。誰も雄鷄のために米

めつぶひと  
粒一つまいて呉れるものも有りませんでした。でも、この雄鶏は若かつたものですか  
ら、どうかして飛んで見たいと思ひまして、木の枝へ上つて行つては羽をひろげました。  
その度に舞ひ降りるばかりでした。  
雄鶏はもう高い聲で関をつくるやうな勇氣も挫けまして、

『クウく、クウく。』

と拾ふ餌もなく鳴きました。

そこへ山鳩が通りかゝりました。山鳩は林の中に聞き慣れない鶏の鳴聲を聞きつけ  
まして、傍へ飛んで來ました。百舌や鶺鴒とちがひ、山鳩は見ず知らずの雄鶏をいたは  
りました。

『もうすこしの辛抱——もうすこしの辛抱——』

と鳴いて、山鳩は林の奥の方へ飛んで行きました。

餓えた雄鶏は一生命に餌を探しはじめました。他の鳥に拾はれないうちに、自分  
で木の實や虫を見つげるためには、否でも應でも飛ばなければ成りませんでした。その時  
になつて、初めて雄鶏の羽が動いて來ました。そして餌らしい餌にありつきました。

雄おんどり鷄どりはこの林はやしへ飛とびに來きて見みて、鷹たかがあんな高たかい空そらを舞まつて歩あるくのも、自じぶん分で餌えを見みつけに行いくのだといふことを知しりました。

三六 たなばたさま

三月ぐわつ、五月ぐわつのお節せつ句くは、樂たのしい子こ供どものお祭まつりです。五月ぐわつのお節せつ句くには、父とうさんのお家うちでも石いしを載のせた板いた屋や根ねへ菖しやう蒲ぶをかけ、爺ぢいやが松まつ林ばやしの方ほうから採とつて來くる笹ささの葉はで粽ちまきをつくりました。七月ぐわつになりますと、又また、たなばたさまのお祭まつりの日ひが山やまの中なかの村むらへも來きました。たなばたさまのお祭まつりに飾かざる竹たけは、あれは外ぐわい國こくの田ゐ舎な家かで飾かざるといふクリスマスの木きも比くらべて見みたいやうなものです。墨すみや紅べにを流ながして染そめた色いろ紙がみ、または赤あかや黄きや青あをの色いろ紙がみを短たん冊ざくの形かたちに切きつて、ああの青あをい竹たけの葉はの間あひだに釣つつたのは、子こ供ども心こころにも優やさしく思おもはれるものです。

三七 巴はたんき且やう杏かう

巴且杏はたんきやうの生なる時じぶん分ぶんには、お家うちの裏うらのお稻荷いなりさまの横手よこてにある古ふるい木きにも、あの實みが密集かたまつて生なりました。父とうさんは自じぶん分ぶんの子供こどもの時じぶん分ぶんと、あの巴且杏はたんきやうの生なる時じぶん分ぶんとを、別々べつべつにして思おもひ出だせないくらゐです。巴且杏はたんきやうは李すももより大おほきく、味あじも李すもものやうに酸すくはありません。あの木きは、先さきの方ほうの少すこし尖とがつて角つのの出でたやうな、見みたばかりでもおいしさうに熟じゆくしたやつを毎まい年ねんどつさり父とうさんに御馳走ごちそうして呉くれましたつけ。

### 三八 鰻かじかすくひ

父とうさんの兄きやうだい弟だいの中なかに三さんつ年ねんの上うへな友伯父ともをぢさんといふ人ひとがありました。この友伯父ともをぢさんに、隣家となりの大黒屋だいこくやの鐵てつさん——この人ひと達たちについて、父とうさんもよく鰻かじかすくひと出掛でかけました。胡桃くるみ、澤胡桃さはくるみなど、いふ木きは、山毛櫨ぶなの木きなぞと同じやうに、深ふかい林はやしの中なかには生はえないで、村里むらさとに寄よつた方ほうに生はえて居ゐる木きです。漆うるしの葉はを大おほきくしたやうなあの胡桃くるみの葉はの茂しげつたところは、鰻かじかの在あり所かを知らしせるやうなものでした。何故なぜかといひますに、胡桃くるみの生はえ

て居るところへ行つて見ますと、きまりでその邊には水が流れて居ましたから。父さん達は竿を持つて行きまして、石の間に隠れて居る鰍を追ひました。

もしかして竿のかはりに釣竿をかついで、何かもつと他の魚をも釣りたいと思ふ時には、爺やに頼んで釣竿を造つて貰ひました。

斯ういふ遊びにかけては、友伯父さんはなかく※心でした。なにしろ父さんの村には釣の道具一つ賣る店もなかつたものですから、釣竿の先につける糸でも何でもみんな友伯父さんが爺やに手傳つて貰つて造りました。糸は栗の木から取りました。その栗の木の虫から取れた糸を酢に浸けて、引き延ばしますと、木小屋の前に立つ爺やの手から向ふの古い池の側に立つ友伯父さんの手に届くほどの長さがありません。それを日に乾して、釣竿の糸に造ることなどは、友伯父さんも好きでよくやりました。

斯の釣の道具を提げて、友伯父さん達と一緒に復た胡桃の木の見える谷間へ出掛けますと、何時でも父さんは魚に餌を取られてしまふか、さもなければもう面倒臭くなつて釣竿で石の間をかき廻すかしてしまひました。そしてお家の方へ歸つて来る度に、

『釣竿ばかりでは、魚は釣れませんよ。』

と爺やに笑はれました。

## 三九 祖母さんの鍵

お前達の祖母さんのことは、前にもすこしお話ししたと思ひます。祖母さんは、父さんが子供の時分の着物や帯まで自分で織つたばかりでなく、食べるもの——お味噌からお醬油の類までお家で造り祖母さんが自分の髪につける油まで庭の椿の實から絞りまして、物を手造りにすることの樂みを父さんに教へて呉れました。『質素』を愛するといふことを、いろいろな事で父さんに教へて見せて呉れたのも祖母さんでした。祖母さんはよく※い鹽のおむすびを庭の朴の木葉につゝみまして、父さんに呉れました。握りたてのおむすびが彼様すると手にくつきませんし、その朴の葉の香氣を嗅ぎながらおむすびを食べるのは樂みでした。

この祖母さんと言へば、廣い玄關の側の板の間で機を織りながら腰掛けて居る人と、味噌蔵の側の土蔵の前に立つて大きな鍵を手にして居る人どが、今でもすぐに父さんの眼に浮んで來ます。祖母さんの鍵は金網の張つてある重い藏の戸を開ける鍵で、紐と板片をつけた鍵で、いろいろな箱に入つた器物を藏から取出す鍵でした。祖母さんがおよ



めに來た時の古い長持から、お前達の祖父さんの集めた澤山な本箱まで、その藏の二階にしまつて有りました。祖母さんはあの鍵の用が濟むと、藏の前の石段を降りて、柿の木の間を通りりましたが、そこに父さんがよく遊んで居たのです。味噌藏の階上には住居に出來た二階がありました。そこがお前達の曾祖母さんの隠居部屋になつて居ました。

#### 四〇 祖父さんの好きな御幣餅

木曾の御幣餅とは、平たく握つたおむすびの小さいのを二つ三つぐらゐづゝ串にさし、くるみしやうゆう胡椒油をかけ、爐の火で焼いたのを言ひます。その形が似て居るから御幣餅でせう。人々、は爐邊に集りまして、焼きたてのおいしいところを食べるのです。

お前達の祖父さんは、この御幣餅が好きでした。日頃村の人達から『お師匠さま、お師匠さま。』と親しさうに呼ばれて居たのも、この御幣餅の好きな祖父さんでした。祖父さんは學問の人でしたから、『三文文』だの『勸學篇』だのといふものを自分で書いて、それを少年の讀本のやうにして、幼少な時分の父さんに教へて呉れました。山の中にあつた父さんのお家では、何から何まで手製でした。手習のお手本から讀本

まで、祖父さんの手製でした。

#### 四一 お隣りの人達

お隣りの大黒屋は酒を造る家でした。その家でお風呂が立てば父さんのお家へ呼びに  
来ましたし、父さんのお家でお風呂が立てばお隣りからも呼ばれて入りに来ました。田舎  
のことで、日が暮れてからお隣りまでお風呂を呼ばれに行くにも、祖母さん達は提灯  
つけて通ひました。二軒の家のもものは、それほど親しく往つたり来たりしましたから、子  
供同志も互に親しい遊び友達でした。それに、お隣りの鐵さんでも、その妹のお勇さ  
んでも、祖父さんのお弟子として父さんのお家へ通つて来ました。父さんのお家の方から  
見ますと、大黒屋は一段と高い石垣の上にあります。父さんのお家のすぐ下のところ  
まで父さんのお家の桑畠が續いて居ましたから、朝日でもさして来るとお隣りの家  
の白い壁がよく光りました。

父さんはこゝでお前達に、自分の生れたお家のこともすこしお話ししようと思ひます。父  
さんのお家は昔は本陣と言ひまして、村でも舊いゝお家でした。父さんの幼少な時分

には、昔のお大名が木曾路を通る時に泊まつたといふ古い部屋まで残つて居ました。  
 部屋々々には、いろ／＼な名前が昔からつけてありまして、上段の間、奥の間、中の  
 間、次の間、それから寛ぎの間などといふのが有りました。祖父さんはいつでも書院に  
 居ました。父さんもその書院に寝ましたが、曾祖母さんが獨りで寂しいといふ時には離  
 れの隠居部屋へも泊りに行くことが有りました。祖父さんの書院の前には、白い大きな  
 花の咲く牡丹があり、古い松の樹もありました。月のいゝ晩なぞには松の樹の影が部屋の  
 障子に映りました。この書院から中の間へつゞく廊下のあたりは、父さんのよく遊ん  
 だところです。中の間はお家のなかでも一番明るい部屋でして、遠く美濃の國の方の空ま  
 でその部屋から見えました。祖母さんや伯母さんが針仕事をひろげるのもその部屋でし  
 たし、父さんが武者繪の敷寫しなどをして遊ぶのもその部屋でしたし、お隣りのお勇さ  
 んが手習に來て祖父さんの書いたお手本を習ふのもその部屋でした。  
 お隣りの鐵さんは、父さんのお家の友伯父さんと同じ年々らゐで、一緒に遊ぶにも父さ  
 んの方がいくらか弟のやうに思はれるところが有りました。近所の子供の中で、遊んで  
 氣の置けないのは、問屋の三郎さんに、お隣りのお勇さんでした。この人達は父さんと  
 同じ年でした。祖父さんは字を書くことが好きで、赤い毛氈の上へ大きな紙をひろげて、

夜遅くなるまで何かよく書きましたが、その度に眠い眼をこすりく蠟燭を持たせられるのはお勇さんや父さんの役目でした。

末子よ。お前は『おぼこ』といふ草の葉を採つて遊んだことが有りますか。あの草の葉は糸にぬいて、みんなよく織る真似をして遊びませう。お隣りのお勇さんもあの『おぼこ』を採つて来て織ることを楽しみにするやうな幼い年頃でした。

#### 四二 屋號

どこの田舎にもあるやうに、父さんの村でも家毎に屋號がありました。大黒屋、俵屋、八幡屋、和泉屋、笹屋、それから扇屋といふやうに。笹屋とは笹のやうに繁る家、扇屋とは扇のやうに末の廣がる家といふ意味からでせう。でも笹屋と言つてもそれを『笹の家』と思ふものもなく、扇屋と言つても『扇の家』と思ふものはありません。屋號といふものは、その家々の符牒のやうに思はれて居るものでした。

### 四三 お墓参りの道

村の人達——殊に女の人の通る裏道は並んだ人家に添ふて村の裏側に細くついて居ました。父さんのお家の裏木戸から、竹藪について廻りますと、その細い裏道へ出ました。祖母さんに連れられて、父さんはよくその道をお墓の方へ通ひました。

お墓へ行く道は、村のものだけが通る道です。旅人の知らない道です。田畠に出て働く人達の見える楽しい静かな道です。

父さんのお家のお墓は永昌寺まで登る坂の途中を左の方へ曲つて行つたところにあります。これが誰だ、あれが誰だ、と言つて祖母さんの教へて呉れるお墓の中には、戒名の文字を赤くしたのが有りました。その赤い戒名はまだこの世に生きて居る人で、旦那さんだけ亡くなつた曾祖母さんのやうな人のお墓でした。祖母さんは古い苔の生えたお墓のいくつも並んだ石壇の上を綺麗に掃いたり、水をまいたりして、

『御先祖さま、今日は。』

と言ふやうにお花を上げました。祖母さんがお墓の竹箒を立てかけて置くところは大きな杉の木の根キでしたが、その杉の木の間から馬籠の村が見えました。

お墓はかにある御先祖ごせんぞさまは永昌えいしやう院いん殿どんと言いひました。永昌えいしやう寺じのお寺てらと同じ名なでした。あの御先祖ごせんぞさまが馬籠まごめの村むらも開ひらけば、お寺てらも建たてたといふことです。あれは父とうさんのお家うちの御先祖ごせんぞさまといふばかりでなく、村むらの御先祖ごせんぞさまでもあるといふことです。

なんと、あの御先祖ごせんぞさまのやうに、開ひらかうと思おもへばこんな村むらも開ひらけて行ゆきますし、建たてようと思おもへば永昌えいしやう寺じのやうなお寺てらが建たつて、それが父とうさんの代だいまで續つづいて來きて居ゐます。先まづ、思おもへ。何もかもそこから始はじまります。御先祖ごせんぞさまがさう思おもつてこんな山やまの中なかへ村むらを開ひらきはじめてといふことには、大おほきな力ちからがありますね。

#### 四四 蜂はちの子こ

地蜂ぢばちといふ蜂はちは、よくく土つちのほひが好すきと見みえまして、地ぢべたの中なかへ巢すをかけます。土手どての側わきのやうなところへ巢すの入口いりぐちの穴あなをつくつて置おきます。

蜜蜂みつばち、赤蜂あかばち、土蜂つちばち、熊蜂くまばち、地蜂ぢばち——木曾きそのやうな山やまの中なかにはいろくな蜂はちが巢すをかけますが、その中なかでも大おほきな巢すをつくるのは熊蜂くまばちと地蜂ぢばちです。熊蜂くまばちは古ふるい土堀どへいの屋や根ねの下したのやうなところの大おほきな巢すをかけますが、地蜂ぢばちの巢すもそれに劣おとらないほどの堅固けんこな

もので、三階にも四階にもなつて居て、それが漆の柱で支へてあります。こんなに地蜂の巣は大きいのですが、地蜂の親といふものは小さな蜂で、熊蜂の半分もありません。あの小さな建築技師が三階も四階もある巣を建て、一階毎に澤山な部屋を造るので、そこから、そこには餘程の協けた力といふものが入つて居るのでせう。

父さんの田舎の方ではあの蜂の子を佃煮のやうにして大層賞美すると聞いたら、お前達は驚くでせうか。一口に蜂の子と言ひましても、木曾で賞美するのは地蜂の巣から取つた子だけです。蜂の親は食べませんが、どうかするとあの巣の中からは親に成りかけたのが出て來ます。それを食べます。お前達はそこいらに居る蜂が庭なぞへ飛んで來て花の蕊を出たり入つたりするのを見かけるでせう。それからあの黄色い蓋のしてある蜂の巣の見事に出來たのを見かけることも有るでせう。蜂は汚いものでは有りません。もしお前達が木曾でいふ『蜂の子』を食べ慣れて、あたゝかい御飯の上のせて食べる時の味を覺えたら、

『父さん、こんなにおいしものですか。』

と言ふやうに成るでせう。

ある日、友伯父さんは裏の木小屋の近くにある古い池で蛙をつかまへました。土地のもの

が地蜂の巣を見つけるには、先づ蛙の肉を餌にします。それを友伯父さんはよく知つて居ましたから、細い竿の先に蛙の肉を差し、飛んで来る蜂の眼につきさうな場處に立て、別に餌にする小さな肉には紙の片をしばりつけて出して置きました。丁度釣をするものが魚を待つて居るやうに、友伯父さんは蜂の来るのを待つて居ました。蛙の肉を食べに来た蜂は餌をくはへて巣の方へ飛んで行きますが、その小さな蛙の肉についた紙の片で巣の行衛を見定めるのです。斯うして友伯父さんは近所の子供達と一緒に、ある地蜂の巣を見つけたことが有りました。地蜂の巣を取りに行くものは、巣の出入口へ火薬を打ち込んで、澤山な親蜂が眼を廻して居る間に獲物を手に入れるのだと聞きました。そして巢を持つて逃げ歸るのだと聞きました。どうかすると蘇生つた蜂に追はれて刺されたといふ人の話も聞きました。さうなると鐵砲をかついで獸を打ちに行くも同じやうなものです。

#### 四五 青い柿

『もうお前さんはそんなに赤くなつたのですか。』



とまだ青くて居る柿が、お隣りの柿に言ひました。この青い柿と、赤い柿とは、お百  
 姓の家の庭にある二本の柿の木の枝に生つて居ました。

赤い柿は青い柿を慰めようと思ひまして、

『さう、力を落すものでは有りません。お前さんだつても今に、私のやうに好い色がつき  
 ますよ。』

と言ひましたら、青い柿は首を振りまして、

『いえ、あのお猿さんが蟹にぶつけたのも、きつと私のやうな澁い柿で、自分で取つて食  
 べたといふのはお前さんのやうな甘い柿ですよ。』

と力を落したやうに言ひました。

お百 姓は庭へ見廻りに來まして、赤い柿を大きな箆に入れて持つて行つてしまひまし  
 た。その木の枝の高い上の方には、たつた一つだけ柿の赤いのが残つて居ました。残つた  
 赤い柿が高いところからお隣りの柿を見ますと、まだ一つも色のついたのが有りませんで  
 したから、

『どうしてお前さんは、そんなに愚圖々々して居るんですか。』  
 と尋ねました。さう言はれると、青い柿はまた力を落したやうに、

『澁い柿は何時までたつても澁いと言ひますよ。さういへば節分の日に、棒を持つた人が来て、『さあ、生ると申すか、生らぬと申すか』と言つて、柿の木を打ちませう。その時、もう一人の人が柿の木に代つて、『生ります、生ります』と答へますね。あの棒で強く打たれ、ば打たれるほど、柿は甘くなるとかき聞きました。どうも私は節分の日に、棒で打たれ方が足りなかつたと思ひます。』と答へました。

柿の好きなお百姓の子供は青い柿を見に來ましたが、取つて食べて見る度に澁さうな顔をして、食べかけのを捨て、しまひました。それからお隣りの赤い柿の方へ行つて、たつた一つだけ高いところに残つて居たのを長い竿で落しました。もうお隣りの木の枝には一つも赤い柿がありません。それを見ると、青い柿は自分獨り取残されたやうに、よいに力を落しました。

そのうちに、お百姓が復た庭へ見廻りに來ました。今度は青い柿の生つた木の下へ來まして、斯う聲を掛けました。

『御覽、甘い柿はもう一つもなくなつてしまひました。今度はお前さんの番に廻つて來ましたよ。どんな柿の澁いのも、霜が來れば甘くなります。皮をむいて軒下に釣るして置いて甘くなります。澁い柿はもつとそこに辛抱してお出なさい。そして時の力といふ

のをお待ちなさい。』

四六 小鳥の先達

小鳥の来る頃になりますと、いろ／＼な種類の小鳥が山を通りました。

鶇、鶇、子鳥、深山鳥、類白、山雀、四十雀——とても数へつくすことが出来ま

せん。あの足の色が赤くて、羽に青い斑の入った斑鳩も、他の小鳥の中にまじつて、好きな榎木の實を食べに來ました。

木曾の山の中は小鳥の通り路だと言ふことでして、毎朝々々、夜のあけがたには驚くばかり澤山な小鳥の群が山を通ります。その中でも、群をなして多く通るのは鶇、鶇などで

この小鳥の群には、必ず一羽づゝ先達の鳥があります。その鳥が空の案内者です。澤山に隨いて行く鳥の群は案内する鳥の行く方へ行きます。もしかして案内する鳥が方角を間違へて、鳥屋の網にでもかゝらうものなら、隨いて行く鳥は何十羽ありまして

も皆同じやうにその網へ首を突込んでしまひます。

『さあ、皆さん、お支度は出来ましたか。』  
 そんなことを案内する小鳥が言つて、澤山な鳥仲間の先に立つて出掛けるのだらうと思ひます。  
 鳥にも先達はありますね。

#### 四七 鳥屋

村の人達に連れられて、山の上の方の鳥屋へ遊びに行つた時のことをお話しませう。  
 鳥屋は小鳥を捕るために造つてある小屋のことで、何方を向いても山ばかりのやうなところ、その小屋が建て、あります。屋根の上は木の葉で隠して、空を通る小鳥の眼につかないやうにしてあります。その小屋の周圍に、細い丈夫な糸で編んだ鳥網の大きなのが二つも三つも張つてあるのです。網を張つた高い竹竿には鳥籠が掛つて居ました。その中には罌が飼つてありまして、小鳥の群が空を通る度に好い聲で呼びました。  
 『もしく、鶉さん。』  
 この罌になる鳥の呼聲は、春先から稽古をした聲ですから、高い空の方までよく徹り

ました。それを聞きつけた小鳥の先達が好い聲に誘はれて降りて来ますと、他の小鳥も同じやうに空から舞ひ降りて来ます。

その時、降りて来た小鳥をびつくりさせるものは、急に横合から飛出す薄黒いものと、鷹の羽音でもあるやうなプウ〜唸つて来る音です。

『これは堪らん。』

と小鳥の先達は張つてある網の中へ飛び込みます。他の小鳥もあはてまして、みんな網の中へ飛び込みます。鳥屋で捕れる小鳥はこんな風にして網にかゝりますが、小鳥をびつくりさせたのは他のものでも有りません。横合から飛出した薄黒いものは、鳥屋で人の振る竹竿の先についた古い手拭か何かの布でした。鷹の羽音でもあるやうに唸つて来た音は、その竹竿を手にした人が口端を尖らせてプウ〜何か吹く眞似をして見せた聲でした。

鳥屋で捕れる小鳥は、一朝に六十羽や七十羽ではきかないと言ひました。この小鳥の捕れる頃には、村の子供はそろ〜猿羽織を着ました。急に降つて来て、また急に止んでしまふやうな雨も、深い林を通りました。

## 四八 爐邊

爺やが山から茸を採つて來たり、栗を拾つて來たりする頃は、お家の爐邊の楽しい時でした。

爺やは爐で栗を焼いて、友達や父さんに分けて呉れるのを楽しみにして居ました。ある晩、爺やが裏のお稻荷さまの側から拾つて來た大きな栗を爐にくべまして、おいしさうな焼栗のほひをさせて居ますと、それを爐邊の板の上で羨ましさうに見て居た澁柿がありました。

『庄吉爺さん、栗の澁が焼けてそんなに香ばしさうになるものなら、一つ私も焼いて見て呉れませんか。』

とその澁柿が言ひました。爺やは父さんの見て居る前で、爐邊にある太い鐵の火箸を取出しました。それで澁柿に穴をあけました。栗を焼くと同じやうにその澁柿を爐にくべました。そのうちに、※い灰の中に埋まつて居た柿の穴からは、ぷう／＼澁を吹出しまして、焼けた柿がそこへ出來上りました。

『さあ、私も食べて見て下さい。』

とその柿が父さんに御馳走して呉れるのを貰ひまして、黒く焼けた柿の皮をむきましたら、軒下に釣るして乾した柿でもなく、霜に逢つて甘くなつた柿でもなく、その爐邊でなければ食べられないやうな、おいしい變つた味の柿でした。

#### 四九 山の中へ来る冬

東京で『ネツキ』といふ子供の遊びのことを父さんの田舎では『シヨクノ』と言ひます。山の中は山の中なりに子供の遊びにも流行がありまして、一頃『シヨクノ』が村中に流行りました。どこの田圃側へ行つて見ても、どこの畠の隅へ行つて見ても、子供といふ子供の集まつて居るところでは、その遊びが始まつて居ました。枯々とした裏庭に出て、父さん達は『シヨクノ』の遊びにする細い木を探したり、それを手ごろの長さに切つたり、地べたへよく打ちこめるやうに先の方を尖らせたり、時にはもう幾度か勝負をした揚句に土のついで齒のこぼれたやつを削り直したりして遊びました。父さん達がそんな子供らしいことをして居る間に、爺やはまた木曾風な背負梯

しごかた 子を肩にかけ、なたこし 鉈を腰に差しまして、き 木の枝をおろすために林の方へと出掛けました。  
 やまなか 山の中へ来る冬は、か 斯うして冬ごもりの支度にかゝる爺やのところへも、『シヨクノ』の  
 あそ 遊びに夢中になつて居る父さん達のところへも一緒にやつて來ました。  
 くら 黒い枯枝や黒い木の見えるお家の裏の桑 畠の側で、まい 朝爺やはそこいらから集め  
 き て來た落葉を焚きました。あさ 朝の焚火は、さむ 寒い冬の來るのを楽しく思はせました。

五〇 木曾の焼米

きそ 木曾の焼米といふものは、あを 青いやわらかい稻の香氣がします。

『お師匠さまが好きだから。』

と言つて、お勇さんの家からも、つきたての焼米をよく祖父さんのところへ貰ひました。  
 とう 父さんのお家の祖父さんは好きな焼米をかみながら、ほん 本を讀んで居たやうな人かと思ひ  
 ます。

お勇さんの家では、まい 毎年酒を造りましたから、うら 裏の酒藏の前の大きな釜でお米を蒸しま  
 した。それを『うむし』と言つて、ちゆうばこ 重箱につめては父さんのお家へも分けて呉れまし



た。あの『うむし』も、父さんの子供の時分に好きなものでした。

五一 屋根の石と水車

屋根の石は、村はづれにある水車小屋の板屋根の上の石でした。この石は自分の載つて居る板屋根の上から、毎日々々水車の廻るのを眺めて居ました。

『お前さんは毎日動いて居ますね。』

と石が言ひましたら、

『さういふお前さんは又、毎日座つたきりです。』

と水車が答へました。この水車は物を言ふにも、ぢつとして居ないで、廻りながら返事をして居ました。

風や雪で水車小屋の埋まつてしまひさうな日が來ました。石は毎日座つて居るどころか、どうかすると風に吹き飛ばされて、板屋根の上から轉がり落ちさうに成りました。水車は毎日動いて居るどころか、吹きつける雪に埋められまして、まるで車の廻らなくなつてしまつたことも有りました。

この恐ろしい目に逢つた後で、屋根の石と水車とが復た顔を合せました。石はもう水車に向つて、

『お前さんは毎日動いて居ますね。』

とは言はなくなりました。水車も、もう屋根の石に向つて、

『お前さんは毎日座つたきりですね。』

とは言はなくなりました。

## 五二 炬燵

いろ／＼な話の出る山家のあたゝかい炬燵。鳥がとまりに行くところは木です。子供が冷いからだを温めに行くところは、家のものゝ顔の見られる炬燵です。

## 五三 唄の好きな石臼

石臼ぐらゐ唄の好きなものは有りません。石臼ぐらゐ、又、居眠りの好きなものも有りません。

冬の夜長に、粉挽き唄の一つも歌つてやつて御覽なさい。唄の好きな石臼は夢中になつて、いくら挽いても草臥れるといふことを知りません。ごろく／＼ごろく／＼石臼が言ふのは、あれは好い心持だからです。もつと、もつと、と唄を催促して居るのです。そのかはり、すこし手でもゆるめてやつて御覽なさい。居眠りの好きな石臼は何時の間にか動かなくなつて居ます。そして何時までも居眠りをして居ます。父さんのお家の石臼は青豆を挽くのが自慢でした。それを黄粉にして、家中のものに御馳走するのが自慢でした。山家育ちの石臼は爐邊で夜業をするのが好きで、靴や『あかぎれ』の切れた手も厭はずに働くものゝ好いお友達でした。

#### 五四 冬の贈り物

峠の上から村の小學校へ通ふ生徒がありました。近いところから通ふ他の生徒と違ひまして、子供の足で毎日峠の上から通ふのはなかく骨が折れました。でも、この生徒は

家から學校まで歩いて行く路が好きで、降つても照つても通ひました。寒い、寒い日に、この生徒が遠路を通つて行きますと、途中で知らないお婆さんに逢ひました。

『生徒さん、今日は。』

とそのお婆さんが聲を掛けました。お婆さんは通り過ぎて行つてしまはないで、

『生徒さん、今日も學校ですか。この寒いのに、よくお通ひですね。毎日々々さうして精出して下さると、このお婆さんも御褒美をあげますよ。』

と言ひました。

知らないお婆さんは見かけによらない優しい人でして、學校通ひをする生徒がかじかんだ手をして居ましたら、それをお婆さんは自分の手で温めて呉れました。

『まあ、斯様なかじかんだ手をして、よく寒くありませんね。そのかはり、お前さんが遠路を通ふものですから、丈夫さうに成りましたよ。御覽、お前さんの頬ぺたの色は好くなつて來たこと。』

とさう言ひました。

生徒は知らない人から斯様なことを言はれたものですから、そのお婆さんをよく見ました

ら、右の手には山からでも伐つて来たやうな細い木の杖をついて、左の手には籠を提げて居ました。籠の中には、青々とした露の蕾が一ぱい入つて居ました。そのお婆さんは、まるでお伽話の中にでも出て来さうなお婆さんでした。

『お前さんは誰ですか。』

と生徒が尋ねましたら、お婆さんはニツコリしながら、提げて居る籠の中の露の蕾を見せまして

『私は「冬」といふものですよ。』

と生徒に言つて聞かせました。夫から、こんな事も言ひました。

『お家へ歸つたら、父さんや母さんに見てお貰ひなさい。お前さんの頬べたの紅い色もこのお婆さんのこゝろざしですよ。』

## 五五 少年の遊学

父さんは九つの歳まで、祖父さんや祖母さんの膝下に居ましたがその歳の秋に祖父さんのいゝつけで、東京へ學問の修業に出ることに成りました。父さんは友伯父さん

と一緒にお家の伯父さんに連れられて行くことに成りました。

『二人とも東京へ修業に行くんだよ。』

と伯父さんに言はれて、父さんは子供心にも東京のやうなところへ行かれることを楽しみに思ひました。父さんより三つ年長の友伯父さんが、その時やうやく十二歳でした。

今から思へば祖母さんもよくそんな幼少な兄弟の子供を東京へ出す氣になつたものですね。その時の父さんは今の末子より年が二つも下でしたからね。

この東京行は、父さんが生れて初めての旅でした。父さんが荷物の用意といへば、小さな玩具の鞆でした。それは美濃の中津川といふ町の方から玩具の商人が来た時に、祖母さんが買つて呉れたものでした。

『お前が東京へ行く時には、この鞆へ金米糖を一ぱいつめてあげますよ。』  
と祖母さんは言ひました。父さんもその小さな鞆に金米糖を入れてもらつて、それを持つて東京京に出ることを楽しみにしたやうなそんな幼少な時分でした。

## 五六 祖父さんと祖母さんのおせんべつ

祖母おばあさんは、おせんべつおせんべつのしるししるしににと言いつて、東とうきやう京きやうへ出でる父とうさんのたために羽織はおりや帯おびを織おつて呉くれました。

『トン／＼ハタリ、トンハタリ。』

と祖母おばあさんは例れいの玄關げんくわんの側わきにある機はたに腰掛こしかけまして、羽織はおりにする黄八丈きちやうの反物たんものと、子供こどもらしい帯地おびちとを根氣こんきに織おつて呉くれました。

『トン／＼ハタリ、トンハタリ。』

その祖母おばあさんのおせんべつおせんべつが織おれる時じぶん分ぶんには、父とうさんが生うまれて初はじめての旅たびに出でる時ときも近ちかなつて來きました。

祖父おぢいさんは、父とうさんに書かいた物ものを呉くれました。好すきな焼やき米こめでも食たべながら田舎ゐなかで本ほんを讀よまうといふ祖父おぢいさんのことことですから、父とうさんが東とうきやう京きやうへ行いつてから時とき々／＼出だして見みるやうにと言いひまして、少せうねん年ねんのたためになるやうな教訓をしへを七まい枚まいばかりの短冊たんざくに書かいて呉くれました。それを紙かみに包つみまして、紙かみの上うへにも父とうさんを送おくる言葉ことばを書かいて呉くれました。

『これは大だい事じにして置おくがいゝ。東とうきやう京きやうへ行いつたら、お前まへの本箱ほんばこのひきだしにでも入いれて置おくがいゝ。』

と言いつて呉くれました。それが祖父おぢいさんのおせんべつおせんべつでした。

## 五七 伯父さんの床屋

東京をさして學問に行かうといふ頃の友伯父さんも、父さんも、まだ二人とも馬籠風に髪を長くして居ました。友伯父さんはもう十二歳でしたから、そんな山の中の子供のような髪をして行つて東京で笑はれては成らないと、お家の人達が言ひました。そこで友伯父さんだけは頭を五分刈にして行くことに成りました。ところが、村には床屋といふものが有りません。仕方なしに、伯父さんが裏の桐の木の下の友伯父さん連れて行きまして、伯父さんが自分で床屋をつとめました。面白床屋がそこへ出來ました。腰掛はお家の踏臺で間に合ひ、胸に掛ける布は大きな風呂敷で間に合ひました。床屋をつとめる伯父さんの鋏は、祖母さん達が針仕事をする時に平常使ふ鋏でした。

この伯父さんは若い時分から神坂村の村長をつとめたくらゐの人でしたが、なにしろ床屋の方は素人でしたから、友伯父さんの髪をデヨキ〜とやるうちに、長いところと短いところが出來て、すっかり奇麗に刈りあげるのはなかく大變な仕事でした。



にはとびつどろ 鶏は驚いて、桐の木の下に頭をさげて居る友伯父さんの方へ飛んで來ました。そして、髪を刈つて貰つて居る友伯父さんの側で鳴きました。長いことお馴染の友伯父さんが東京へ行つてしまふので、お家の鶏もお別れを惜んで居たのでせう。

## 五八 お別れ

山家では何かある度にお客さまをして、互に呼んだり呼ばれたりします。いよく父さん達が東京行の日もきまりましたので、お隣りのお勇さんの家では父さん達をお客さまにして呼んで呉れました。その晩は伯父さんも友伯父さんも呼ばれて行きましたが、『押飯』と言つて鳥の肉のお露で味をつけた御飯の御馳走がありましたつけ。父さんはお雛の家へも遊びに行つて見ました。幼少い時分から父さんを抱いたり負つたりして呉れたあのお雛の家へも、もう遊びに行かれないかと思ひまして、お別れを告げるつもりもなく遊びに行く氣になつたのです。お雛の父親の名は數衛と言つて村でもきたないので評判な髪結ですとは、前にもお話しして置いたと思ひます。日頃父さんはそのきたない髪結の子に育てられたと言つて村の人達にからかはれて居ましたから、數衛

の家へ遊びに行くところを誰かに見つけられたら、復た人にからかはれると思ひました。そこで父さんはお墓参りに行く道の方から、成るべく知つた人に逢はない田圃の側を通りまして、こつそりと出掛けて行きました。

數衛の家は村の中でもずつと坂の下の方にありました。父さんの小學校友達に扇屋の金太郎さんといふ子供がりましたが、その金太郎さんの家よりもまだずつと下の方でした。父さんが遊びに行きましたら、數衛は大層よろこびまして、爐にかけてお鍋で菜飯をたいて呉れました。それからお茄子の味噌汁をもこしらへまして、お別れに御馳走して呉れました。藁で編んだ苴の敷いてある爐邊で、數衛のこしらへて呉れた味噌汁はお茄子の皮もむかずに入れてありました。たゞそれが輪切りにしてありました。しかし父さんは後にも前にも、あんなおいしい味噌汁を食べたと思つたことは有りません。

## 五九 さやうなら

お家を出る日が來ました。

その前の日に、曾祖母さんは友伯父さんと父さんを側へ呼びましてお家の爐邊でいろく

なことを言つて聞かせて呉れました。父さんはこの年とつた曾祖母さんがお膳にむかひながら、お別れの涙を流したことをよく覚えて居ます。でも曾祖母さんはしつかりとした氣しやうひと、象の人で、父さん達がお家を出る日には、もう涙を見せませんでした。

伯父さんに附いて東京へ行く父さんの道連には、吉さんといふ少年もありました。吉さんはお隣りの大黒屋の子息さんで、鐵さんやお勇さんの兄さんに當る人でした。この人は父さん達と違ひまして、眼の療治に東京まで出掛けるといふことでした。なにしろ父さんはまだ九歳の少年でしたから、草鞋をはくといふ事も出来ません。そこで爺やが小さな麻裏草履を見つけて來まして、踵の方に紐をつけて呉れました。父さんはその新しい草履をはいた足で、お家の臺所の外に遊んで居る鶏を見に行きました。大きな玉子をよく父さんに御馳走して呉れた鶏は、

『コツ、コツ、コツ、コツ。』

とお名残を惜しむやうに鳴きました。

その邊にはお馴染の桐の木も立つて居ました。その桐の木は背こそ高くても、まだ木の子供でして、

『いよく、東京の方へ行くんですか。私も大きくなつてお前さんを待つて居ます。御

覽、あそこにはお前さんに桑の實を御馳走した桑の木も居ます。お前さんのよく登つた柿の木も居ます。あの土藏の横手の石垣の間には、土藏の番をする年とつた蛇が居て、今でも居眠りをして居ます。私達はみんなお前さんのお友達です。私達をよく覚えて居て下さいよ。』

と言ひました。

父さんはその草履で、表庭の門の内にある梨の木の側へも行きました。

『まあ、好い草履を買つて貰ひましたね。その草履には紐が結んでありますね。お前さんが大きくなつて歸つて來たら、私もまた大きな梨をどつさり御馳走しますよ。』

とその梨の木と言ひました。

伯父さんは父さん達を引連れまして、日頃親しくする近所の家々へ挨拶に寄りました。大黒屋へ寄れば小母さん達が家の外まで出て見送り、俵屋へ寄ればお婆さんが出て見送つて呉れました。八幡屋、和泉屋、丸龜屋、まだその他にも伯父さんの挨拶に寄つた家は澤山ありましたが、その度に父さん達は坂になつた村の道を峠の上の方へ登つて行きました。

馬籠の村はづれまで出ますと、その峠の上の高いところにも耕した畠がありました。そこ

にも伯父さんに聲を掛けるお百姓がありました。父さんが遊び廻つた谷間と、谷間の向ふの林も、その邊からよく見えました。山と山の重なり合つた向ふの方には、祖父さんの好きな恵那山が一番高い所に見えました。祖父さんも、祖母さんも、さやうなら。馬籠も、さやうなら。恵那山も、さやうなら。

六〇 峠の馬の挨拶

馬籠の村はづれには、杉の木の生えた澤を境にしまして、別に峠といふ名前の小さな村があります。この峠に、馬籠に、湯舟澤と、それだけの三ヶ村を一緒にして神坂村と言ひました。

『名物、栗こはめし——御休處。』

こんな看板を掛けた家が軒しかない程、峠は小さな村でした。そこに住む人達はいづれも山の上を耕すお百姓ばかりでした。その村にも伯父さんが寄つて挨拶して行く家がありました。入口の柱のところに繋がれて居た馬は父さん達の方を見まして、『お揃ひで、東京の方へお出掛けですか。』

と聲を掛けました。この馬は背中に荷物をつけて父さんのお家へ来たこともある馬でした。やがて父さんは伯父さんの後に附いて、めづらしい初旅に上りました。父さんが歩いて行く道を木曾路とも、木曾街道ともいふ道でした。

## 六一 初旅

『もしく、お前さんの草履の紐が解けて居ますよ。』  
と路ばたに咲いて居た龍膽の花が父さんに聲を掛けて呉れました。龍膽は桔梗に似た小さな草花で、よく山道なぞに咲いて居るのを見かけるものです。父さんがその小さな紫いろの花の前で自分の草履の紐を結ぼうとして居りますと、伯父さんは父さんの側へ来て、腰を曲めて手傳つて呉れました。慣れない旅ですから、おまけに馬籠から隣村の妻籠へ行く二里の間は石ころの多い山道ですから、父さんの草履の紐はよく解けました。その度に伯父さんが足をとめては紐を結んで呉れました。

## 六二 木曾川

となりむら 隣の妻籠には、お前達の祖母さんの生れたお家がありました。妻籠の祖父さんといふ人もまだ達者な時分で、父さん達をよろこんで迎へて呉れました。そこで、初日は妻籠に泊りまして翌朝また伯父さんに連れられて出掛けました。妻籠の吾妻橋といふ橋の手前まで行きますと、鶺鴒が飛んで居ました。その鶺鴒はあつちの大きな岩の上へ飛んだり、こつちの大きな岩の上へ飛んだりして、

『どうです。妻籠には大きな川があるでせう。』  
 と言つて見せました。

父さんも、そんな大きな川を見るのは初めてでした。青い、どろんとした水は渦を巻いて、大きな岩の間を流れて居ました。

『これが木曽川ですか。』

と父さんが尋ねましたら、鶺鴒は尻尾を振つて、

『いえ、これは蘭の山奥の方から流れて来る川です。木曽川へ入る川です。』

と教へて呉れました。

吾妻橋の手前で見た川が大きいと思ひましたら、木曽川はそれよりも大きな川でした。

## 六三 御休處

何といふ深い山や谷が父さんの行く先にありましたらう。父さんは木曾川の見える谷間について、林の中を歩いて行くやうなものでした。どうかすると晝間でも暗いやうな檜木や杉のしんく〜と生えて居るところを通ることもありました。あゝこれが三留野といふところか、これが須原といふところか、と思ひまして、初めて見る村々が父さんにはめづらしく思はれました。何もかも父さんには初めてゞした。高い山の上の方から村はづれの街道のところまで押し寄せて來て居る黒い岩だの石だのを見るのも初めてゞした。父さんが東京へ出る時分には、鐵道のない頃ですから、是非とも木曾路を歩かなければ成りませんでした。もう好い加減歩いて行つて、谷がお仕舞になつたかと思ふ時分には、また向ふの方の谷間の板屋根から煙の立ち登るのが見えました。さういふ煙の見えるところにかぎつて、旅人の腰掛けて休んで行く休茶屋がありました。

『御休處』

として、白いところに黒い太い字で書いてある看板は、父さん達にも寄つて休んで行けと言ふやうに見えました。さういふ休茶屋には、きまりで『御嶽講』の文字を染めぬ



いた布きれがいくつも軒のき下したに釣つるしてありました。  
 樂たのしい御休處おんやすみどころ。父ちちさんが祖母おばあさんから貰もらつて來きた金米糖こんべいたうなぞを小ちひさな鞆かばんから取とりだすのも、  
 その御休處おんやすみどころでした。場處ばしよによりましては、冷つめたい清水しみづが樋とひをつたつて休茶屋やすみちややのすぐ側わきへ流ながれて來きて居ゐます。さういふ清水しみづはいくらでも父ちちさんに飲のませて呉くれました。

#### 六四 寢覺ねざめの蕎麥屋そばや

寢覺ねざめといふところには名高なだかい蕎麥屋そばやがありました。

木曾路きそぢを通とほるもので、その蕎麥屋そばやを知らしないものはないと、伯父おぢさんが父ちちさん達たちに話はなして呉くれました。そこは蕎麥屋そばやとも思おもへないやうな家うちでした。多勢おほぜいの旅人たびびとが腰掛こしかけて、めづらしさうにお蕎麥そばのおかはりをして居ゐました。伯父おぢさんは父ちちさん達たちにも山やまのやうに盛りあげたお蕎麥そばを奢をこりまして、草臥くたぶれて行ゆつた足を休やすませて呉くれました。

#### 六五 浦島太郎うらしまたらうの釣竿つりざを

寝覚には、浦島太郎の釣竿といふものが有りました。それも伯父さんの話して呉れたことですが、浦島太郎の釣をしたといふ岩もありました。それから、あの浦島太郎が龍宮から歸つて來まして自分の姿をうつして見たといふ池もありました。木曾の人は昔からお伽話が好きだったと見えますね。岩にも、池にも、釣竿にも、こんなお伽話が残つて、それを昔から言ひ傳へて居ます。

## 六六 棧橋の猿

『もし、お前さんの背中に負つて居るのは何ですか。』  
 木曾の棧橋といふところの休茶屋に飼つてあるお猿さんが、そんなことを父さんに尋ね《たづね》ました。  
 父さんは小さな鞆を風呂敷包にしめて、それを自分の背中に負つて居ましたから、『お猿さん、これは祖母さんがおせんべつに呉れてよこしたのです。途中で退屈した時におあがりと言つて、祖母さんが呉れてよこした金米糖です。わたしはこれから東京へ修業に行くところですが、この棧橋まで來るうちに、金米糖も大分すくなく

なりました。』

とお猿さんに話して聞かせました。

このお猿さんの飼つてあるところは高い崖の下でした。橋の下を流れる木曾川がよく見えて、深い山の中らしい、景色の好いところでした。街道を通る旅人は誰でもその休茶屋で休んで行くと見えて、お猿さんもよく人に慣れて居ました。

父さんが東京へ行く話をしましたら、お猿さんも羨ましうに、

『わたしも一つ金米糖でも頂いて、皆さんのお供をしたいものです。御覽の通り、わたしはこの棧橋の番人です、皆さんのお供をしたいにも、こゝを置いては行かれませぬ。まあ、この山の中の土産話に、そこにある古い石でもよく見て行つて下さい。これから東京へお出になりましたら、その石に發句が一つ彫つてあつたとお話し下さい。その發句をつくつたのは昔の芭蕉翁といふ人だとお話し下さい。』

と言ひました。

伯父さんも、吉さんも、友伯父さんも、みんなお猿さんの側へ來まして、崖の下にある古い石碑の文字を読みました。それには、

『かけはしやいのちをからむ蔦かづら』

としてありました

六七 山越し

やがて、父とうさんは伯父おぢさんに連れられて、『みさやま峠たうげ』といふ山やまを越こしにかゝりました。父とうさんも馬籠まごめのやうな村むらに育そだつた子供こどもです。山道やまみちを歩あるくのに慣なれては居ゐます。それにしても、『みさやま峠たうげ』は見上みあげるやうな險けしい山坂やまさかでした。大人おとなの足あしでもなかく骨ほねが折をれるといふくらゐのところでした。何故なぜ、伯父おぢさんがそんな山越やまこしにかゝつたかといふに、早はやく皆みんなを連れて馬車ばしやのあるところまで出でたいと考かんがへたからです。木曾きそは山やまに圍かこまれた深ふかい谷間たにあひのやうなところですから、どうしても峠たうげ一つだけは越こさなければ成ならなかつたのです。何なんと言いつても父とうさんはまだ幼少ちひさかつたものですから、友伯父ともおぢさんや吉きちさんのやうには歩あるけませんでした。

『さあ、金米糖こんべいたうを出だすから、もつと早はやくお歩あるき。』

と伯父おぢさんに言いはれましたも、父とうさんの足あしはなかく前まへへ進すすまなくなりしました。伯父おぢさんの金米糖こんべいたうに勵げまされて、復またた父とうさんも石ころの多い山坂やまさかを登のぼつて行いきました

が、そのうちに日が暮れかゝりさうに成つて來ました。伯父さんはもう困つてしまつて、父さんの締めて居る帯に手拭を結びつけ、その手拭で父さんを引いて行くやうにして呉れました。

六八 沓掛の温泉宿

今だに父さんはあの『みさやま峠』の山越しを忘れません。草臥れた足をひきずつて行きまして、日暮方の山の裾の方にチラ／＼チラ／＼燈火のつくのを望んだ時の嬉しかった心持をも忘れません。

その燈火のついて居るところが、沓掛の温泉宿でした。

六九 乗合馬車

沓掛まで行きましたら、やうやくその邊から中仙道を通ふ乗合馬車がありました。それから父さんは伯父さんや吉さんや友伯父さんと一緒に東京行の馬車に乗りまし

て、長い長い中仙道の街道を晝も夜も乗りつゞけに乗って行きました。やがて馬車がある町を通りました時に、父さんは初めて消防夫の梯子登りといふものを見ました。高い梯子に乗った人が町の空で手足を動かして居ました。父さんは馬車の上からそれを眺めて、子供心にめづらしく思つて行きました。伯父さんの話で、そこが上州の松井田といふ町だといふことも知りました。またそれから飽きるほど乗って行くうちに、馬車はある川の岸へ出ました。川にかけた橋の落ちた時とかで、伯父さんでも誰でも皆その馬車から降りて、水の浅い所を涉りました。

父さんは馬丁の背中に負さつて、川を越しました。その川は烏川といふ川だと聞きました。

まあ、父さんも、どんなに幼少い子供だつたでせう。東京行の馬車の中には、一緒に乗合させた他所の小母さんもありました。その知らない小母さんが旅の袋からお菓子なぞを出しまして、それを父さんにおあがりと言つて呉れたこともありました。いくら乗つても乗つても、なか／＼東京へは着かないものですから、しまひには父さんも馬車に退屈しまして、他所の小母さんに抱かれながらその膝の上に眠つてしまつたことも有りました。

七〇 終の話 をはりはなし

こんな風ふうにして父とうさんは自分じぶんの生うまれたふるさとを幼少ちひさな時じぶん分ぶんに出でて來きたものです。それか  
 ら長ながい年とし月つきの間あひだを置おいては、木曾きそへ歸かへつて見みますと、その度たびにあの山やまの中なかも變かはつて居ゐま  
 した。しかし父とうさんの子こ供どもの時じぶん分ぶんに飲のんだふるさとのお乳ちの味あじは父とうさんの中なかに變かはらずにあ  
 りますよ。

太たらう郎らうよ、次じらう郎らうよ、お前まへ達たちも大おほきくなつたら父とうさんの田ゐ舎なかを訪たづねて見みて下ください。

## ふるさとの後に

この本は前に出した『幼きものに』と姉妹のやうにして出します。あの佛蘭西土産には、父さんのお話ばかりでなく、佛蘭西の方で聞いて來たいろくなお話も入れて置きました。が、この『ふるさと』には父さんのお話ばかりを集めました。この本が出來ましたら、木曾の伯父さんの家に勉強して居る三郎のところへも一冊送りたいと思ひます。父さんはこの少年の讀本を書かうと思ひ立つた頃に、別につくつて置いたお話が一つあります。それは『兄弟』のお話です。それをこの本の後に添へようと思ひます。こゝにそのお話があります。

早く眼がさめても何時までも寢て居るのがいゝか、遅く眼がさめてもむつくり起きるのがいゝか、そのことで兄弟が争つて居ました。

そこへこの兄弟の祖父さんが來まして、『まあ、お前達は何をそんなに争つて居るのです。』と尋ねました。



兄あにが言いふには、

『祖父おぢいさん、私わたしは早く眼めがさめました。そのかはり何時いつまでも寢ねて居ゐました。弟おとうとは遅おそく眼めがさめました。そのかはり私わたしより先さきに起おきました。私わたし達たちは今いまそのこと言いひ合あつて居ゐるところです。』

『私わたしは遅おそく眼めがさめても、兄にいさんのやうに長ながく寢ねて居ゐないで、むつくり起おきた方はうがいゝと思おもひます。』

と弟おとうとが言いひました。すると、兄あにが言いふには、

『弟おとうとがあんなこと言いつて威ゐ張ばつて居ゐます。そのくせ、私わたしが早く眼めのさめた時じぶん分ぶんには、弟おとうとはまだなんにも知しらないでグウ／＼グウ／＼と眠ねむつて居ゐました。私わたしは鶏にほとりの鳴ないたのを知しつて居ゐます。夜よの明あけたのも知しつて居ゐます。』

『そんなこと言いつて兄にいさんが威ゐ張ばつても、何いつ時までも兄にいさんのやうに寢ねて居ゐたら、眼めがさめないのも同おなじことです。』

とまた弟おとうとが言いひました。

祖父おぢいさんはこの兄きやうだい弟あらしの争きひを聞きいて笑わらひ出だしました。さうして斯かう言いひました。

『馬鹿ばかな兄きやうだい弟だ。お前まへ達たちがそんなこと言いつて争あつて居ゐるうちに、太おてん陽とうさまは

もう出<sup>で</sup>てしまつたぢやないか。』

(終)

# 青空文庫情報

底本：「名著複刻 日本児童文学館 二」ほるぷ出版

1973（昭和48）年3月初版発行

底本の親本：「ふるさと」實業之日本社

1920（大正9）年12月5日発行

※底本は、物を数える際や地名などに用いる「ケ」（区点番号586）を、大振りにつくっています。

※疑問点の確認にあたっては、「島崎藤村全集 第十六卷」新潮社、1951（昭和26）年3月15日発行を参照しました。

入力：Nana ohbe

校正：林 幸雄

2004年1月21日作成

2004年2月19日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

# ふるさと

島崎藤村

2020年 7月18日 初版

## 奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail [info@aozora.gr.jp](mailto:info@aozora.gr.jp)

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>  
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。  
<http://tokimi.sylphid.jp/>